

平成23年度協会フォーラム講演録

「若者と政治」

財団法人 明るい選挙推進協会

『若者の社会参画』

若者エンパワメント委員会前代表 両角 達平

『若年層の低投票率について考える』

神戸大学大学院法学研究科教授 品田 裕

『若者と選挙～iVote の活動を通して』

学生団体 iVote 創設者 原田 謙介

『私たちににとって政治とはどのような意味があるのだろうか?』

鹿児島大学法文学部教授 平井 一臣

『政治を身近にする一つの方法 未成年模擬選挙』

模擬選挙推進ネットワーク代表 山崎 武昭

この講演録は、平成二三年度に実施した地域ボランティアアフォーラム（連携型を含む）及び若者リーダーフォーラムでの講演のうち、若者と政治に関する講演五本を収録したもので、一部要約しております。

目 次

1	若者の社会参画……………	5
	両角 達平	
2	若年層の低投票率について考える……………	39
	品田 裕	
3	若者と選挙～ ivote の活動を通して～ ……	85
	原田 謙介	
4	私たちにとって政治とは……………	125
	どのような意味があるのだろうか？	
	平井 一臣	
5	政治を身近にする一つの方法……………	155
	未成年模擬選挙	
	山崎 武昭	

若者の社会参画

若者エンパワメント委員会前代表 両角 達平

平成23年7月15日 於 愛知県豊田市

ただいま御紹介にあずかりました両角達平と申します。今日はよろしくお願いいたします。まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。今、自分は、静岡県立大学の国際関係学部というところで4年生をしています。先ほど紹介いただいた若者エンパワメント委員会——通称YECと呼んでいるんですが、ここで前に代表をやっていました。今は代表を次の世代に引き継いで、普通のメンバーとしてこの団体にかかわっています。そして、もう1つ、NPO法人Rightsとごうのをやっているんですが、これは18歳選挙権の実現だったり、政治参画と政治教育というのを促進する活動等をやっています。東京の明るい選挙推進協会の方と、このRightsの勉強会で知り合い

になりました、そこからこうやってちよっとお話ししてもらえませんかというふうで紹介いただいて、今日こういうふうにお話しさせていただくことになったという経緯でございます。また、ラボ・パーティーという国際交流や英語の表現活動もしていました。僕の母がその活動の先生をやっていました、それで幼稚園の年長か小学校1年生くらいからその活動をずっとやっていました。なので、中学1年生の時にアメリカに留学というかホームステイに、1カ月ほど行きました。それで国際交流というのに興味を持ち、国際系の何かをしたいという動機でこの静岡県立大学の国際関係学部に入りました。なのに気づいたらこの若者支援の活動をやってしまっているんです。人はわからないですね。そんな感じです。

今日お話しすることですが、『若者の社会参画』という演題をいただきまして、簡単に僕のやっているYEC（若者エンパワメント委員会）の紹介を中心に、その活動内容だったり、YEC設立のきっかけだったり、事例の紹介、活動を通して若者当事者として感じていることや抱負というのを簡単にお話しさせていただきます。

『若者の社会参画』というと、社会参画というのは何かと政治参画や政治教育とい

うふうにすぐ頭の中で結びついてしまうと思うんですが、必ずしもそういうわけではなくて、そして、今求められている社会参画というのは必ずしも政治教育ではないんじゃないかなと僕は思ったりしています。だけど、いつかそれは絶対に政治教育、政治参画に結びつくことだと思っていますので、この時代に求められている社会参画というのを皆さんと一緒に考えていけたらなと思っています。

では、Y E Cの紹介をします。Y E Cは、Youth Empowerment Committeeという、ちよつと格好いい名前の団体でして、若者、大学生を中心に活動している団体です。2009年にできた団体で、主にやっている活動としては、1つは若者の社会参画事業、もう1つが啓発事業をやっています。今からその具体的な活動の内容について説明していきます。

まずは、「もうひとつの放課後探しプロジェクト」というのを若者の社会参画活性化事業の1つとしてやっています。この「もうひとつの放課後探しプロジェクト」では、中高生がやりたいことを学校以外の実現することを支援します。例えば、学校以外の場で文化祭をやりたいというのがあったら、「じゃあ、それやろうか」と言

って、その実現を支援するという、本当にただそれだけのシンプルな活動です。簡単にスケジュールを説明しますと、8月の半ばぐらいで1回、参加者と一緒に、やりたいことは何だろうというのを企画立案するキャンプをします。その企画というのは半年の間で実現しなければいけないという条件があるんですが、そのキャンプの後に実現に向けたミーティングを定期的に行っていきます。その時には、サポーターメンバーをカゴメン——放課後メンバー、というんですが、その人たちと一緒にミーティングをしていきます。そして、「こうしたらいいんじゃない」、「いや、このほうがいいよ」とか、ああだこうだ言って一緒にサポーターをしていきます。それと、メンターという社会人の方で、アドバイスなどをくれる人たちからもアドバイスをもらうミーティングなども開いたりして、より実現を確実にしていくものに行っていきます。そして、1月、2月、3月とかの冬あたりで実現します。最後に報告会、YECの活動報告会みたいなのがあつて、そこで一緒に今回こういうイベントをやりました、その中でこういうことを一緒に考えたりしましたというのを社会人や大人、あとは若者に向けて講演会という感じでやったりしています。それが「もうひとつの放課後探しプロジェクト

ト」です。中高生を真ん中に据えて、それを支えるカゴメンやYECが、二重になってサポート、さらに、社会人の方がメンターとしてたまに面倒を見てくれるという感じ体制でやっています。

去年、この放課後探しプロジェクトを初めて始めたんですけれども、そこで出た企画を簡単に紹介したいと思います。「キラキラフェスティバル」というのが最初に出ました。これは、簡単に言えば、学校以外の場での、学校の枠を超えた、いろんな学校と一緒に1つの文化祭をやるうよという企画です。これを企画した高校3年生の女の子は、もうちょつと他校の人たちとつながりをつくりたいという思いがあったんですね。では、その思いを達成するにはどうしたらいいかなと考えて、このキラキラフェスティバルをやることになりました。ファッションショーだったり、ダンスだったり、あとはバンドなどをやりました。そして、もう1つの企画が、「We are ONE!」ぶっちゃけ「TALK」こういうイベントです。これは高校1年生の9名の女の子が企画したんですけれども、事のきっかけは、これを企画した女の子が恋愛話やぶっちゃける話がすごく好きだった。「じゃあ、それをいろんな人と一緒にやっちゃおうよ」

という、たったそれだけですが、それから企画実現をすることになりました、最終的には恋愛だけではなくて世の中のまじめな話とか、あとは自分のことや家族のことを話せる仕組みをつくって、30〜40人ぐらいを招いてというか、公募して、大人の方も含めた色んな方と話す場をつくりました。また、「ランナウェイなう」というのをやりました。「逃走中」というテレビ番組はご存知でしょうか。ゴールデンタイムでたまにやっているんですが、超本格的な鬼ごっこみたいな感じです。芸能人が逃げるんですが、逃げるときにいろいろ携帯電話などで課題が与えられて、それをクリアしながら鬼から逃げるというテレビ番組があるんです。それを見た中学生が自分たちでもやりたいと言って、最初、学校のレクリエーションで提案したんですが採用されず、この放課後探しプロジェクトでやりたいと言って持ち込んできたんです。それに賛同した高校生2、3人がこれを実現することになりました。本当にすごい規模で、富士山こどもの国という静岡県の県営のテーマパークみたいなのがあって——半径2〜3キロでしょうか、その中でこれをやりました。

今まで説明したのが若者の社会参加活性化事業で、今からお話するのが啓発事業

のほうになります。これは何のためにやるかというと、YECの支援者や理解者を増やすためにやっています。僕らがやりたいことをいろんな人に理解していただかないと、さっきの放課後探しプロジェクトも社会人の方の力をかりることができませんので、こういうこともやったりしています。具体的に何をやっているかというと、講演会・ワークショップ、視察報告、「YECわかもの白書」という冊子も作って配ったりしています。白書はインターネットからダウンロードできますので、是非ご覧ください。もう1つ、若者に対してアンケートをとって、若者は今こういうことを考えているんだよというのを、僕ら若者自身でやるのが大事ではないかと思い、アンケートを実施、公開したりしています。

1つ1つについて簡単に説明しますと、講演会・ワークショップは、実際に若者支援についてあちこちで活動されている詳しい方をお招きしてやりました。例えば、関口さんという横浜市のこども青少年局でバリバリやっている職員の方だったり、NPO関係者の方、NPO運営者の方、学者さん、あとは「ゆう杉並」という東京にある児童館の職員さんを招いたりして実施しました。テーマは、子どもの権利条約とか、

海外の事例とか、あとはシティズンシップ教育——市民教育とか、そういう分野もちょっとかじりつつ、やりました。また、「子ども・若者ビジョン」という、去年の7月に内閣府が発表した、子ども・若者政策の大綱みたいなものですが、それについて一緒に考えようということで、実際に「子ども・若者ビジョン」に携わった方をお呼びして、一緒にそれについて話を聞いて、みんなで考えるみたいな会を何度かやりました。僕らYEC自身の勉強にもなったし、来られた大人の方との理解を深めるための機会にできました。

視察報告というのは、去年のゴールデンウィークにスウェーデンのスタディーツアーというのがありまして、スウェーデンは若者政策がすごく進んでいるということで、僕も参加して視察をしまして、その報告会を静岡でやりました。また、YECには、顧問というか世話人のような方で津富教授という静岡県立大学の教授がいるのですが、その人が最近またスウェーデンに行ったということだったので、またその報告会をしたりしました。

さっきお話しした「100人アンケート」ですが、実際にとった結果を簡単に紹介

します。静岡とスウェーデンでとったんです。最初は2年前に、静岡の町の中で100人の人に、「アンケートに答えてもらえますか」と言つて1人1人に声かけながら書いてもらいました。その後は、さっき言つたスウェーデンのスタディーツアーに参加した最後の日に、町に出て、100人に英語で話しかけて聞きました。それで、そのアンケートを比較したらすごく面白い結果が出たんです。まず、Q1「自分がダメな人間だと思いますか？」という質問をしました。そうしたら、これに対して「はい」と答えた人が、静岡の若者は100人中58人、スウェーデンの若者は100人中14人という結果になりました。そして、Q2「社会は自分の力で変えられると思いますか？」という質問をしたんですけれども、これに対して「はい」または「そう思う」と答えた人は、静岡の若者は100人中たった24人、スウェーデンの若者は100人中65人が答えました。こんなことも調べて公開したりしています。

それから「YECわかもの白書」ですが、これは先ほどお話した講演会に招いた講師の方の講演録を全部文字起こしたものです。先ほどのアンケートも入っています。放課後プロジェクトに参加した中高生による感想も中に入っていたり、YECの

紹介も入っていて、YECが丸わかりな報告書になっています。YECのホームページで公開していますので、ぜひご覧いただけたらと思います。この白書があるというなど思うのは、講演会に来られなかった人も後々ゆっくり見て、こんなことを言っていたなと勉強になると思ったんですね。文字媒体にして共有すると、無くなることはないと思ったので、そういった意味でも深い理解にもつながると思ったんです。全部読んで、また自分たちのふだんの生活のことを考えたりというときに、深い理解になると思って作りました。

次に、YECを始めたきっかけだったり、今後のこと、あとはYECをやっている中で大事にしていることをお話します。

YECを始めたきっかけですが、静岡県立大学にはNPOや社会貢献系の学生団体がいっぱいありまして、僕も大学2年生くらいのときにそういう学生団体をやっていました。その運営にどうしたらいいか困っているときに、NPOという中間支援団体みたいな、学生団体の活動をサポートする学生団体に助けってもらってすごく助かりま

した。自分のやりたいことを助けてもらえるのは、本当に助かると思ったというのがまず1つ目のきっかけです。もう1つのきっかけは、学生団体の活動をしていくに当たって、先程言ったYECの世話人の津富教授という静岡県立大学の教授の研究室を結構使わせてもらっていました。そこに色んな若者が来て色んな話をして新しいアイディアが出てくるというのがすごく楽しくて、そこでミーティングをしたり、パソコンをいじったりと、そういう場所があるのがすごく大事だと思ったんです。場所があるだけでこんなに違うなんてすごいなと。だから、そういう場所をもっと大学の中にもいっぱいつくりたいと思ったんです。

今の2つのきっかけ、つまり、「やりたいことを助けてくれる」というのと、「そういう場所があるといい」という話を津富先生とあるとき話をしたんです。そうしたら、先生は学会の関係でたまたまフィンランドに行ってきたところで、フィンランドにそういうユースセンターというのがあると言っていて。ユースセンターというのは若者が学校以外の場で集まれる場所ですが、児童館のもう少し上の年齢の若者を対象にした感じです。フィンランドに行ったら、こういうユースセンターがあった。若者が来

て、そこで働いている職員さんが世話してくれるとか、やりたいことがあったらそれと一緒に考えて実現するとか、まさに今、YECがやっているようなことが、フィンランドでは場所もちゃんとあるという話をしてくださったんです。そういえば僕の地元にもそういうのがあったなと思います。僕は長野県の茅野市育ちで、中学・高校と通っていました。その茅野市の駅のビルの中に「CHUKOらんどチノチノ」というのがありました。ちょっと恥ずかしい名前ですが、CHUKOというのは中高生のCHUKOで、中高生しか入れない施設です。その中にはライブハウス、ライブスタジオだったり、キッチンとか、ダンスができるところだったり、何にもないただの広場とか、机、いすがあったりして、僕はそこでいつもたむろしていて、勉強したり、友達と会ったり、遊んだりしていたんです。「そういえばそういうのが地元にあったよ、先生」と言ったら、「じゃあ、それ、静岡にはないからつくろうか」みたいな話で、それでYECが始まりました。

YECを始めたのはそういうきっかけですが、活動するに当たっての問題意識というのとは何かと言うと、やっぱりさっきのアンケートの結果で、日本の若者は自分に自

信がない、社会に対しての信頼がないのではないかというのが、僕自身、若者当事者としてもそう思っただけですね。だから、自信を失っている、社会もすごく遠いものと考えてしまっているのではないかと思って、社会に対して蚊帳の外感を持っているのではないかというのが、Y E Cの問題意識であります。

Y E CはYouth Empowerment Committeeという団体ですが、このエンパワメントというのはどういう言葉なのかちょっと簡単に説明したいと思います。まず、差別や偏見を減らすこと。例えば、どうせ今の若者はこんなだからとか、若者は大人より未熟だからというのは偏見、差別だと思うんです。そもそも、まずそういう考えを減らすというのが1つあります。その後に、そういった差別、偏見があったとしても、若者が力を発揮できるようにすること。これがエンパワメントの考え方です。皆さんも御存じだと思いますが、そのルーツは公民権運動、ブラック・エンパワメント——マーティン・ルーサー・キングが行った黒人と白人の立場を平等にしていこうという運動ですが、それとまるっきり同じです。黒人だから、黒人は馬鹿でうすのろだからと言われていた、そういった差別、偏見を減らすこと。そして、もし仮にそうだとし

でも、黒人はそもそも力がないわけではなくて、もともとあったんだけどそれを発揮できないのは社会のせいなんだ、と考えていくというのが、エンパワメントの発想です。なので、単に教育というのとちよつと違って、社会自体の環境を整えていくというのがエンパワメントでは大事だとされています。

僕ははこの考え方を大事にしているので、若者に対する支援だけではなくて、社会に対する啓発事業もやっています。そういうふうにして理解を深めていくことが、若者にとって住みやすい環境になっていくのではないかと思います、このエンパワメントという概念を大事にしています。

先ほどY E Cのきっかけのほうで話したんですが、Y E Cはそもそも、「じゃあ、そういう若者が集まれる場所をつくらうよ」ということで、最初は場所をつくらうと思っただんです。なので、実は最初の名前は「若者エンパワメントセンター設置委員会」という名前だったんです。すごく長くて、Y E Cには変わりないんですが、「Youth Empowerment Center 設置委員会」と言う名前だったんです。だけど、場所というのは結局ハードです。よく箱物になって終わるとか、ありますね。そういうもので

はなくて、場所よりも機会が大事なんではないかと思ったんです。そもそも施設をつくること自体、すごく時間がかかったりしますので、まずはそういった機会をつくっていく、それは目に見える形のハードの物ではなくて、そういう機会をつくっていくことを大事にしていこう、ということでは「若者エンパワメント委員会」という名前になりました。

実際にイギリスなどでは、若者政策がすごく進んでいて、さっきのユースセンターというのも、町に1個は当たり前にある。そこには、デタッチト・ユースワーカーという若者の支援活動をする職業の人たちがいます。イギリスでも若者というのは必ずしも自分から施設に来るわけではなくコンビニとかあっちこっちにたむろしていたりします。そういう人たちに「ちよつとユースセンターにおいでよ」とちよつとくらい言っても別に来るわけではないですね。なのでそのユースワーカーが、そういった若者たちには何度も会いに行つて関係をつくっていくというのが、実際に向こうで行われたりしています。そういう考えはやっぱり大事だなと思つて、YECは場所よりも機会を大事にしていこうというふうになりました。



京都市ユースサービス協会作成 参考

輸入された言葉です。そのときはソサエティーという言葉で入ってきたんですが、福沢諭吉はこれを「人間交際」と名づけたらしい。だから、人間交際という機会に参加していくことではないのかと考えられます。参画と参加があるんですが、YECでは

社会参画の話をしてします。これは、社会参画はこういうふうに考えられるのではないかという図です。YECでお招きした講師の川中大輔さんという方が、京都市ユースサービス協会というところで話し合って考案して、できたのがこの図になります。この図は何を示しているかといいますが、まずこの社会参画という言葉を考えてときに、まず社会という言葉は何かという話をされました。「社会」という言葉は、明治維新以降に海外から

参画を大事にしたいなと思っています。一体何が違うのかというと、参加というのはその場所に行くとか、イベントに参加するとか、出席するとか、ただそれだけです。物理的なことかというと、そこに行くというだけですが、参画というのは企画の「画」なので、そういうイベントを企画する側になるとか、その運営主体になることを指している。だから、そこまでできたらいいなという意味で、この社会参画という言葉の説明をします。

社会参画はこの6つに分類されるのではないかという話をされていまして、1つ目が、「経済参加」です。これは日々のお金を払ったりなんだったたり、労働とか、対価をもらってというので、経済的に社会参加していると言われるのではないかという考え方です。「文化参加」というのは、芸術活動、バンドやアートの活動などを指しています。「地域参加」は、お祭りなんかを指しています。「市民活動参加」というのは、ボランティアとか、僕らがやっているような活動にかなり近いのではないのでしょうか。「政治参加」は、まさにこの明るい選挙推進協議会さんでもやられている、選挙とかそういうものの参加を指します。「司法参加」は、この前から始まった裁判員制度で

裁判員になることとか、そういうものを指しています。

「ではYECは若者をエンパワメントするに当たって、どういう社会参画を若者にやつてもらいたいのか」と考えるのは、僕はちょっとおかしいと思います。というのも、例えば、YECが市民活動参加、地域参加、政治参加をやりたいというふうにやつてしまうと、さつき放課後プロジェクトでいろんなイベントが出ましたが、学校を超えた文化祭、なんかが出たと思うんですが、若者がやりたいというそういうイベントすらも、「これはどう考えても文化参加だからだめでしょう」と、否定してしまうことになってしまふんですね。だから、僕らはそういうのは考えないで、若者がやりたいと言ったらそれを大事にして、主体性を出せる企画を引き出してやっていくことが大事だと思ってやっています。なので、YECでは特にこの分野を活性化していくということはやっていません。福沢諭吉は社会を人間交際と言ったように、社会参画には、すべて根っこに人間交際、人間関係があると思います。どんな企画でもそこに通ずるものは絶対あると思うんですね。1人でやる企画では1人しかないないんですが、複数の人数でより多くの人を巻き込んでやると、人間交際はすごく活発に

なると思うんです。そういうことが起きることが社会参画につながるのではないかと
思っています。なので、YECでは、放課後プロジェクトでは、どんなイベントでも
ウエルカムだという感じで、オープンな感じでやっています。その中で人間交際を学
んでいくことが大事なかなと思っています。なので、僕らのミッションは「すべての若
者が思いを形にすることを通じて、社会のつくり手となるために」ということになり
ます。いろんな学校を超えた文化祭をやりたいというその思いを形にしていくこと。
その中で、社会というのはこういう感じなんだというのを少しわかってくると思うん
ですね。それは必ずしも政治についてよく知ることでもなく、すごく身近な友達で
はなくて、ちょっと遠い大人の人や先輩、中高生と普段関わらない大学生、そういう
人たちと関わる中で、人間関係がわかったり、それが社会なんだとわかっていくと思
うんです。すごく規模は小さいかもしれませんが、それが大事ではないかと思いま
す。そうやって活動していく中で、自分とちょっと離れた人と信頼関係ができること、
社会というのはこうなっているんだなとわかっていくと思うんですね。それで、社会
のつくり手にちょっと近づくのではないかということで、このミッションができまし

た。

次に簡単に海外の事例を紹介させていただきます。先ほどの視察報告の時にスウェーデンの視察に行ったと言ったんですが、そのときの話をします。向こうの現地でどういう取り組みをやっているのか、「若者政策・若者参画政策の先進国であるスウェーデンを視察し、日本の若者政策・若者参画政策への示唆を得る」という崇高なビジョンを掲げまして行きました。期間は2010年5月2日から5月9日のゴールデンウィークです。主催は特定非営利活動法人Rightsです。参加者はRightsのメンバーと、大学教授、大学院生、中学・高校の教員、ジャーナリスト、そして大学生——僕とYECの後輩ですが、参加しました。ちなみに、今、僕はRightsのメンバーをやっています。これに参加したときは、僕はまだメンバーではなくて、YECとして行きました。

報告の前に、そもそもスウェーデンというのはどんな国なのかという話を簡単にします。人口は930万人。日本の約1・2倍の面積ですが、人口は930万人で、神奈川や大阪とほとんど同じ規模です。だから、人口密度がすごく少ないです。首都は

ストックホルムで、人口が80万人ほどです。豊田市が40万人ぐらいですね。なので、そのちょうど2倍ぐらいです。僕の住んでいる静岡市が70万人ぐらいなので、ちょうど同じぐらいです。有名どころでいうと、IKEAという家具メーカーですごく有名だったり、H&Mというユニクロといい勝負をしているファストファッション業界の産業が有名です。あとは、ソニーと提携しているソニー・エリクソンの、その創業者エリクソンの出身の国です。よく高福祉・高負担の国と言われていますが、実際に税金も、買うものによって違うんですが、20〜30%です。すごく高くて、そういうふうに見られているので、国際競争力や資本主義は弱いのではないのかと言われているんですが、そんなことはなくて、最近アメリカを抜いてスイスに次いで国際競争ランキング2位になりました。そのぐらい高い経済活動をやっています。また、このデータは本場にびっくりしたんですが、24歳以下の投票率は70%を超えているらしいです。日本でいうと、24歳以下の投票率は20〜30%です。日本だと60代後半の方ですと70〜80%ぐらいの投票率になるらしいですが、そこほとんど同じだということが注目されています。あとは、最近19歳の国会議員が誕生しました。そんな感じの国でござい

ます。

訪問先はどこへ行ったのかというと、結構あちこちに行きました。日本という文科省みたいなところや、全国規模の若者会。青年事業庁というのは、後で説明しますが、若者政策を担当している庁があるんですが、そこに行きました。スウェーデン全国生徒会という生徒会の全国組織みたいところに行ったり。あとは、フリーシユセツトというユースセンターのすごく大きいもので、日本にもボーリング場やバスケットなどが有料でやれるラウンドワンという娯楽施設があちこちにありますが、それが完全無料でできるような感じの施設です。中にクラブハウスもあったりして、何でも無料で使わせているのか、と思うようなのがあったりしましたが、そこにも行きました。あとは、党の青年部、中学、高校、全国青年協議会。そして、後で紹介しますが、「学校選挙2010」にも行きました。最後に先ほどの若者100人アンケートを実施しました。

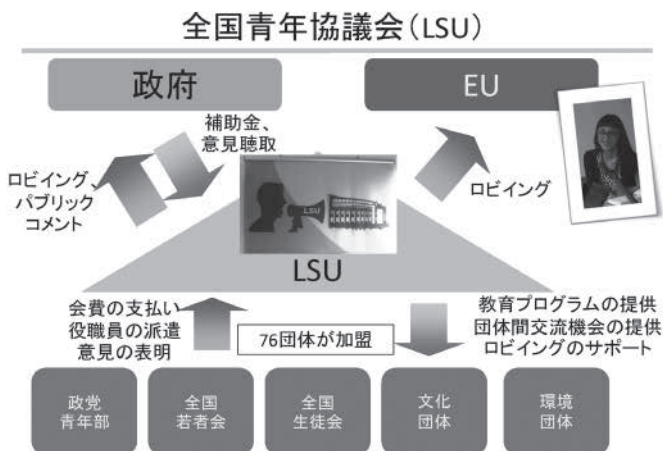
この中から簡単に幾つかピックアップして紹介しますと、まず「青年事業庁」です。ここは若者政策を担当している庁です。省ではなくて庁です。その上に社会統合平等

省というのがあるんですが、その社会統合平等省の下にある庁としてやっています。ただ、実際に若者政策をやっているかというところ、そういうわけでもないんです。日本と同じように色んな省庁がスウェーデンにはあるんですが、若者を対象にした政策は色んな分野が一緒になっていますよね。雇用もそうですし、学校教育も労働もそうです。あとは文化的なこともそうなので、あちこちと結びつけて統合的にやっていかないと難しいだろうとなっている。だから、青年事業庁はそれぞれの企画、政策を全部やるわけではなくて、いろんな庁の中で若者を対象としている政策を監視してチェックしているような感じですよ。実際にその政策が今の若者に対してちゃんと効果的なのかどうかというのを、青年事業庁は監視して、チェックしてという感じでやっています。本当にそれだけしかやっていません。そのためには今の若者の実態をしっかりと知っていかなければいけないので、調査研究をすごく熱心にやったりしています。地域の若者政策のモニタリングといって、その地域によっても結構若者の実態も違うので———すぐく人口規模が少ないとこらだったり、すぐく犯罪率が高くて荒れているところだったりすると若者の状態も違うので、地域ごとで分かれて調査研究もやったりし

ています。それから、補助金や地方政府が若者政策をやっていくのを助けたりしています。僕が面白いなと思ったのが、「若者自治体オブザイヤー」というもので、各自治体で面白い若者政策があつたら、そこに賞金を200万円あげるというもので、毎年1つの都市が選ばれて、地域の若者政策のモチベーションを上げたり、インセンティブにしたりということをやっています。つまり、実際の政策とか、実現レベルではなくて、ほとんど確認や、地方政府がやることのモチベーションを上げさせるようなことをやっているという感じです。

次に、全国若者会を紹介します。スウェーデンでは地域ごとに若者会があります。日本でいうなら、静岡市で1つ若者会があつて、豊田市で1つ若者会があつてというふうになっています。その若者会が何をやっているかというと、地域の政策に若者の声をできるだけ反映させていくという活動をやっています。そして、全国若者会は、それぞれの地域の若者会との交流や教育をやっています。これらを全て若者がやっています。代表の人にも会ったんですが、23歳なので、今年僕と同じ年齢になります。その人がこの全国若者会のトップとして全国若者会を運営していました。

そして、今度はLSU（全国青年協議会）です。先ほどの全国若者会との関係はこんな感じ（下図）です。LSUは、政府やEUと、全国の若者団体をつなげる役割をやっていきます。若者の声をLSUという拡声器を通して大きくすることで政府に伝えていく、そんな活動をしています。なので、LSUに入るというのは、団体ごと入っていく感じです。LSUに会費を払い、LSUは、加盟団体同士の交流の機会を提供したり、リーダーシップなどの講座などの機会を提供したりという関係になっています。あとは、ロビイングで若者の声を政府に届けるという活動をやっています。政府については、さっき言った青年事



業庁とも仲よくやっています、一緒にEUの若者のフォーラムに行ったりして、若者当事者としての意見を述べるというのがあります。この図中の写真の人はニルマーさんという人ですが、この人も23歳でしたが、23歳にしてEUのユースフォーラムに行ったりして、ロビイング活動をやったりしていました。

皆さんにも関係するのではないかと思うんですが、「学校選挙2010」という団体もありました。これは学校で行われる模擬選挙です。本物の選挙ではありません。学校の中でやっている選挙で、スウェーデンの国政選挙、地方選挙、あとはEU選挙というのが最近あるんですが、そういう選挙に合わせて同時期に実際に学校内で選挙をやるという活動です。ここには、青年事業庁や中央生徒協議会、全国若者会がサポートに入っています。各団体は、学校選挙2010のWEBサイトの運営、学校からの質問対応、マニユアルづくり、情報発信などを行っています。マニユアルは質がバラバラにならないよう青年事業庁の方で結構しっかりと作っていました。社会統合平等省も一緒にマニユアルをつくって、模擬選挙をやりたいと言った学校に届けて、やることになっています。

これは何がすごいかというと、学生団体、若者団体、学校選挙2010と国、政府が一緒になって事業をやっています。そこがやはりすごいなと思いました。実際の選挙ではないんですが、各政党はこういう政策をやっているというのを生徒に調べさせて、それでプレゼンなどをする。生徒会選挙とは全く別で、国政選挙の選挙を学校でやるんです。例えば、社会民主党がこういう政策をやっていますというプレゼンを生徒が生徒にむけてやり、それを聞いて、他を調べた生徒が他の党のことを話したりして、最後に本物の投票用紙を使って秘密選挙をして、それを実際の国政選挙の開票日に合わせてそちらも開票するという手順です。面白いことに、この選挙の開票結果は、現実の選挙の結果とほとんど同じらしいんです。そういうふうになって、学校の中で選挙の体験を中学・高校からやっているの、結果として投票率もあんなに高いのではないかと思います。

最後に、活動を通して感じたこと、今後どうしたいのかという話をさせていただきます。

若者支援や教育というと、年上の大人や経験ある大人が未熟な若者に対してやる、

というのがこれまで考え方であつたと思うんですが、僕はそうではなくて、若者による若者支援が大事ではないかと最近すごく思います。「当事者が専門家」という言葉があるんですが、だからといって僕が若者の代表だとか、大人にはわからないでしょうと言うつもりはありません。女性だったり、障害者だったり、患者だったり、社会的にマイノリティーとこれまで見られた人たちも、自分たちの権利実現を求めてこれまで数々の運動をしてきました。その中で、医者と患者の例でいえば、これまでは医者という専門家が患者のことを全部知っていて、「あなたはこういう治療がいい」と言つて、全部医者が勝手に物事を決めてしまっている、自分以外の人が全部決めてくれるというふうになつていたんですが、最近はそうではなくて、患者にちゃんと理解を求めて、最後は患者が決めるという形になっています。そういうふうに、女性の社会進出も女性の団体がやっていたり、障害者の団体も全国自立センターの運営は障害者の人が半数以上を占める団体にしていくというふうに、今、大きく変わっているんですね。当事者がやっていくほうが効率がいいし、それが本物なのではないかと。

YECも全く同じなのかなと思つたんですね。社会的にも今、若者はマイノリティー、

社会的弱者になりつつあると、講演会にお呼びした放送大学の宮本先生もおっしゃっていたんですが、そういった中で当事者の声を大きくして伝えていくことがすごく大事ではないかと思っていて、「当事者が専門家」という言葉をすごく大事にしています。これは大事だなとつくづく感じます。先ほどスウェーデンの話もしたんですが、日本は欧州の若者政策から大きく遅れていると思いました。向こうにはユースセンター、ユースワーカー、ユーススタディーというのがすごく身近にあって、ユースセンターは町の中に必ず1つはある。ユースワーカーという職業は日本にはほとんどないと思うんですね。学校とか、市の職員さんが施設の運営をやっていて、そのついでに若者の世話もしてやっているというぐらいだと思います。だから、職業としてあるということが、まずそこで大きく違うなと。ユーススタディーというのは学問なんですけど、向こうにはユーススタディーズ学部という若者学みたいなものがある。そういうのが学問として確立してずっとやってきたと思うと、はたして日本は大丈夫かなとすごく思ったりしています。僕は今、留学の準備をしているんですが、スウェーデンにこの冬から行ってこのユーススタディーというのを勉強しに行きたいと思って、今、英語

の勉強をしています。

日本もこれまでの日本社会のあり方を見直すときが来ているのではないかと思っています。去年、「子ども・若者ビジョン」というのが内閣府で出ました。その内容は、これまでの社会のあり方を見直していこうというふうになっています。これまでは、若者というところから問題視されていたんですね。若者は未熟で、何かあるといけないから、若者の対策をしようというように、これまでは問題視していた。ただ、今、少子高齢化になって、次世代が頑張らないと日本はやっていけないとなったときに、そんな考えではもうだめでしょうと、社会のそういう考え方を大きく変えていこう、僕らが考えている社会は間違っているのではないかといった内容が、「子ども・若者ビジョン」です。だから、国でも少しずつそういった理解が始まっているのではないかと思っています。

これは僕が勉強したことですが、僕の実感からいうと、学校教育もすごく窮屈で、社会の縮図が学校と言いますが、すごく同じ価値観の中でしか過ごす仲間がいなくて、且つ、中学・高校生は今、部活や受験勉強ですごく忙しくて、それ以外の活動が全く

できない状況になっていると思うんですね。まずそういうふうになっているのか。それと、今の時代はすごく先が見通しにくい時代だと思うんです。80年代や高度経済成長期には、大学に行けば企業に入れる、企業に入ってしまったえば、あとは会社が守ってくれるからといって、すごく見通しがつく社会だったんですが、御存じのとおり、就職率もすごく悪くて、且つ、転職もどんどん起きてくる時代なので、そういった時代ではない。1つの価値観にとらわれている時代ではないとなったときに、何が大事かとなったときに、僕は主体的に物事に取り組む機会がなかったら、次世代の若者によって次の時代の社会を作っていくことができないのではないかと思います。窮屈な学校教育の中でも部活やサークルはありますが、あれは先生に「とりあえずこれに入っておけ」みたいに言われる。だから、学校が、生徒はこういうものに入るものだとか決めてしまう。そこで、自分のことを自分で決められない。大学受験のときも、大した経験がないと、さて何を基準に決めればいいんだろうかとなったときに、偏差値やブランド名や都市で決めてしまったりする。外部のもので決めてしまうというふうになっています。僕はたまたま国際交流を中学生の頃にやっていたので、自分の価値観

で学部を決めることができました。だから、そうやって自分から主体的に何かに取り組んだり、決めたりするという機会が余りにも少ないのはまずいのではないかと思うんです。だから、学校教育ももうちょっと緩くなったらいいなと思っているのと、そういう学校以外で様々な経験ができる機会が多くあったらいいのではないかと思います。

最後に、社会参画というと、何かしらちょっと固いことだったり、ニュースだったり、政治だったりというのをイメージしてしまいがちですが、放課後プロジェクトやYECでやっていることを通して思ったのは、社会というのはつまりは人間交際で、人間関係の延長なのではないかと思ったりするんです。先日、Rightsの勉強会でユースワークの専門家の方を招いて知ったことですが、ユースワーカーの仕事とは、社会関係資本を作ることなんだそうです。社会資本の中には、経済資本と文化資本というのがある。経済資本はお金であったり、文化資本というのは知識だったりしますが、それとは別で社会関係資本というのがある。それは何かというと、それは人間関係の資本だと言っています。単に友達が多いといいとか、仲がいいからいいというわ

けではなくて、そういう親密な関係ではなくて、ちょっとだけ遠い人、親の知り合いや、中高生と全く別の大学生——Y E Cの関係がそうですが、あとは、例えば僕がここで今日知り合った方との信頼関係ができていくことが大事ではないか。そういうのをつくっていくのがユースワーカーの仕事ではないかと言っていました。確かにそうだなと、そういうちょっと自分より遠い人との信頼関係をつくっていくことの積み重ねが社会への信頼になると思っただけです。スウェーデンでも、職員さん、大人の方と若者団体をやっている人たちの間でいい関係ができていて、それでアンケートの差もできてしまうのかなと思っただけです。だから、投票率を上げること、「若者よ、選挙へ行け」と言うのももちろん大事ですが、その前にまずはちょっと離れた人との信頼関係をつくる機会に若者をどんどん送り出して行って、信頼関係ができていくその延長として、いつか地域の政治に興味を持つ。知り合いが多いと自分の地域のことにもすごく関心を持てると思うんですね。そして、さらにその延長として国の政治などにも興味を持てたりすると思うんです。だから、社会参画は人間関係、社会関係資本というのを大切にしていくことが大事ではないかと僕は思います。

こんなところで講演を終わりにしたいと思います。御清聴、ありがとうございます。
た。（拍手）

若年層の低投票率について考える

神戸大学大学院法学研究科教授 品田 裕

平成23年7月23日 於 広島県広島市

神戸大学の品田と申します。私は普段は大学では政治学という科目を担当しております。政治学といっても色んな範囲があるんですが、その中で特に選挙のこと、投票行動とかを授業で教えております。また、私自身、そういう方面で研究をやっております。

そういうこともあって、最近はこのいう明推協の活動にお招きいただくことも多くて、あちこちでお話をさせていただいています。私自身、実は大阪市の明推協の活動に参加しております。別に大阪市民でもないですし、大阪に住んだこともないんですが、なぜか大阪市の活動に参加しております。そういうことで個人的にも関心がある

んですね。

最近、特にあちこちでお話しさせていただいて話題になっていることは、若い人の投票率が非常に低くなっている、この点について何とかできないだろうかということ、よく御相談をいただいています。お答えはちょっとできないんですけれども、それをどういうふうに考えたらいいかというヒントぐらいは私のほうでもお話ができそうなので、それをあちこちでお話しさせていただいているんですね。

まず、「はじめに」ということで、最近の選挙のことをお話ししますと、最近はずっと選挙がありますけれども、実は投票率は結構上がったり下がったりしているんですね。特に衆議院選挙が激しくて、高い選挙と低い選挙があります。他方、参議院選挙や統一地方選挙は投票率が低い。コンスタントに投票率を上げる、特に若い人の投票率を上げる必要があると思います。

そもそも選挙に参加する人、投票に行く人というのはどういう傾向があるんだろうかということを表（次頁）にまとめてみました。割と特徴がある。色んな方面で特徴

投 票 率		
低い		高い
若い	年齢	高い
男性	性別	女性
無職・学生	職業	自営業・農業
都市	居住地	地方
賃貸	居住状況	持ち家
非加入	団体	加入
低い	政治関心	高い
強い	政治不信	弱い
弱い	投票義務感	強い
薄い	有効性感覚	濃い
なし	政党支持	あり
弱い	地域愛着度	強い

があるんですが、特に今日は年齢のところに注目していただくと、若い人はずっと投票率が低いものですから、ここのとこが大事なところだと思います。あとは、やはり低いのは都市部です。心持ちという点でいうと、政治に関心が薄いか、政党支持があまりないとか、そういう方が投票にどうしても行かないという傾向がある。特に若い方

ですと、政治に対する関心がなかったり、支持政党はないという人も多かったり、あるいは投票に対して、何で行かないといけないかという義務感が少なかったり、そういうことがあるのではないかと思います。ここから見ていただいても、何となく皆さんの世代はそもそもあまり選挙に行きそうにないというのがわかりただけなのではないかと思います。

続いて、投票率を向上させることの意義を改めて確認したいと思います。多分ここにいらいした皆さんは、同じ20歳代の若者の世代の中でも割と関心が強い方たちだと思うんですが、普通、私が大学でもこういう話をする、大体学生から反発が生まれて、「何でそんなことを言うんですか。選挙なんか別にいいじゃないですか」ということが結構多いんです。なかなか説得するのは難しいんですけれども、ちょっとだけ考えていただきたいことがあるんですね。

最近、皆さんは政治に不満というか、正直なところ、どうですか。あまりこういう運動の場で、本来中立的であるべきだと僕は思うんですが、どうも最近の日本の政治、震災以降の政治を見ていたら、何をしているんだろう、こんなのでいいのかと思うような場面があると思うんですね。ニュースを見てもイライラするとか、ニュースを見たくないとか、政治家の人は何をしているんだろうなという場面が結構あると思うんです。不満があるでしょう。そうしたら、そういう政治に対する不満があったときに、選挙がある世の中と、ない世の中とを考えてみてほしいんです。

選挙のない世の中というのは、我々はちよっと考えにくいんですが、1ついい例が

あって、「水戸黄門」。皆さんはあまり見ないかもしれませんが、見たことがなくても大体わかりますよね。水戸黄門、黄門様というおじいさんが日本全国を旅して、悪いやつを捕まえて謝らせて、世の中がよくなりましたと。毎回そういう話です。あれは一応、舞台設定は江戸時代、ですから選挙はないんです。

そうすると、江戸時代に不満があつて何とかしたいなと思つたら、ひたすら水戸黄門が来るのを待つしかないんです。たまたま47都道府県のうちの1県ぐらいに時々水戸黄門が来てくれて助けてくれる。だけど、もし黄門さんが来なかったら・・・。水戸黄門という人は実在した人ですが、実在した水戸黄門様は名前のとおり水戸から出たことがない。だから、本当は日本中助けに行つてないんですが、フィクションの中の黄門様でもいいです。来てくれたらいいですが、来てくれなかったらどうするかというと、あとは一揆を起こすしかないですね。百姓一揆。聞いたことがあるでしょう。一揆を起こすと死人が出ます。暴力沙汰だし。大体一揆を起こすと、みんな捕まつて、どんなに正しい原因があつたとしても、必ず首謀者は死なないといけません。そういう選挙がない世の中では、本当に命がけで不満を言うしかない。あとは我慢す

るしかない。

ところが、考えてみると、今我々は、不満があると、次の選挙まで間がありそうですが、とりあえず次の選挙でこの不満をぶつけることができるんです。しかも、ぶつけ方といったら、鉛筆を動かすだけ、手を動かすだけでいいんです。「〇〇のばかやろう」とか書いたらだめですよ。ちゃんと自分の意見に従ってこの人がいいと思ったらその党の人に入れればいいし、だめだと思ったら反対党の人に入れればいいので、それは本当に鉛筆を動かすだけで自分たちの政治不満をあらわすことができるんですね。

水戸黄門の時代と今の我々とどっちがいいですか。中には水戸黄門みたいな時代のほうが暴れられて気持ちがいいという人がいるかもしれないけれども、基本的には今の世の中のほうがよほどいいです。ちょっと鉛筆を動かしたら色んなことが変わるんだから。そういうことを考えていただくと、選挙があるというのはすごくありがたいんだということを、ひとつこれは皆さんも理解してもらって、できれば、もしそういうことを言う人が周りにいたら、ちょっと言ってみてほしいと思うんですね。

もう1つ考えてほしいことは、なぜ政治意識を向上させないといけないのかということです。選挙に行っておけばいいんでしようという考え方もあり得ます。

世界を広く見回すと、投票率が高い国というのはいろいろあります。あまり固有名詞を挙げるのはよくないかもしれないけれども、海の方のすぐ近くの国、将軍様とか言っている国では、投票率は99・7%とかです。1000人のうちに3人しか投票に行かない人はいないんですね。ということは、どんな病気の人も、用事のある人も、みんな選挙に引っ張っていかれる。では、そんな99・7%の投票率がいいことかという、あまりよその国のことを悪く言うのはよくないですが、どちらかを選べと言われたら、私は日本を選びます。

そう思うと、高ければいいというものではない。そうすると、ある程度質を伴わないといけない。いい例が1つあって、イタリアという国を皆さんも御存じでしょう。イタリアは南北にすごく細長いんですけれども、南のほうはマフィアの世界です。北のほうは割とヨーロッパっぽい、都会っぽい。南と北で歴史が全然違うんですね。今は1つのイタリアという国だけでも、南のほうはマフィアみたいなことをずっと

500年も600年もやっている。北のほうは割と昔から、1000年近く色んな民主主義を体験しているんですね。

そうすると、最近イタリアも地方分権といつてどんどん地方で色んなことをしようというふうになっているんですが、実際に予算と権限が地方におりてきたときに、南部の人は困ってしまうんですね。選挙は自主的にやったことがないし、考えたこともないし、話し合いもしたことがない。いつも上の人に言われてやっているだけだから、今回もどうしていいかわからない。ところが、北部の人はもう1000年間ずっと話し合いの歴史を持っているから、そうすると、こうしようと言ってみんなで相談して、パツとやってしまう。そうすると、南北の格差がもととあったのがさらに今広くなっていて、イタリアで問題になっている。

日本でも今、地方分権と言っていますので、特に最近だと色んな問題があります。震災の問題1つを見ても、それぞれの地方でどうやって対応するかというのを問われる時代でしょう。皆さんがそれぞれの地域に帰って地域のリーダーとして今後活躍していくということを考えると、ちゃんと話し合いの土壌があつて、何かやるぞと言う

ときに、みんながパツと動いたほうが、よほどいいですね。そういうことを考えると、選挙というのはいいい機会なので、そういうことも話しあってほしいですね。「震災のときのそれぞれの自治体の対応を見てみようよ」という感じで言っていたかどうかというのではないかと思います。

だから、単に投票率ということではなくて、その質を伴って色々考えてほしい。だから、今日はこういう場があつて、参加してくださったというのは、大変いいことだと思います。

ここからは『若い人』ということを考えてみたいと思うんです。若い人というのは色々な意味合いがありまして、例えば、今皆さんは若いですね。ところが、20年たつともう多分中年になっている。僕みたいになる。さらに20年たつと、みなさんのお父さん、お母さんみたいになるわけですね。順番にみんな人間は年をとっていく。だから、信じられないかもしれないけれども、僕も昔は若かったわけでした、みんな若いときが人生に1回はあるんですね。そういう『人生の最初のころの人たち』という意

味が1つあると思うんです。これは世の中共通でね。それから、『今この瞬間に生きている若い人』という意味もあるでしょう。それから、『世代』というのもありますね。その辺を分けて少し検討してみようというのが今からのお話です。

そうすると、ややわかりにくいと感じるかもしれませんが、視覚的に理解していただけたらと思うんですが、最初にまず人生の中で投票率はどうなっているのかというので、図1と図2を見てください。こう見ると、どちらもこういうふうな山型になっています。グラフの左のほうが若くて、右へ行けば行くほど年をとっていくんですが、衆議院が図1で、参議院が図2です。どちらもこういう形をしています。ということが、何が言えるかというと、そもそも若い人は投票率が低い。年とともに投票率が上がっていきます。60歳ぐらいをピークに今度は投票率が下がるわけです。

これは2009年と2010年の図ですけれども、実は昭和20年代からこの形はずっと一緒です。それから、日本だけでなく、よその国でやっても絶対この形になります。面白いです。不思議なことに人類共通で、必ずへの字を逆さまにしたこの形になる。ということは、若い人の投票率が低いのは世界各国、いつの時代にも共通の現象

図1 2009年衆議院選挙 年齢別投票率

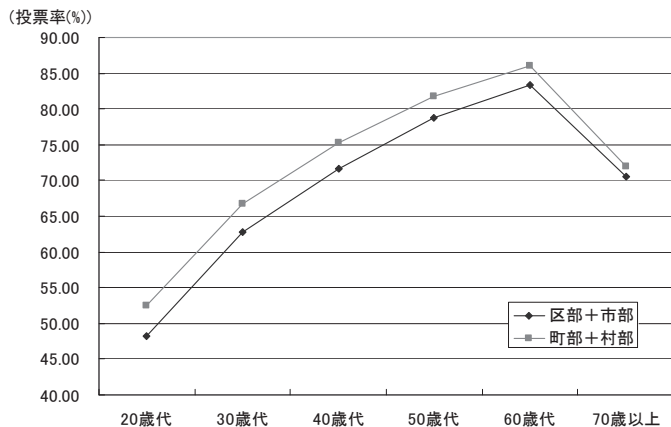
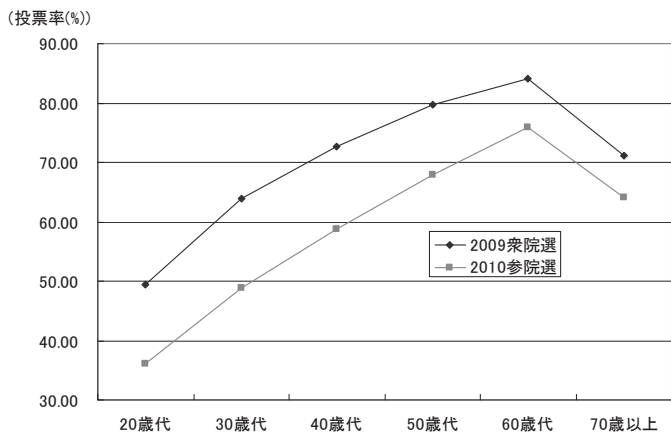


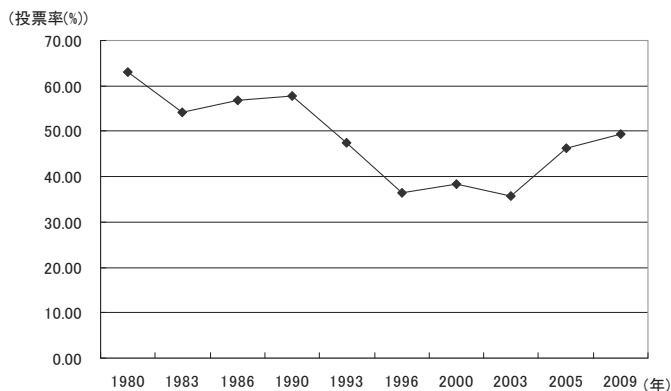
図2 年齢別投票率比較 (2009年衆院選・2010年参院選)



なので、あまり気にしなくてもいいということも1つ言えるんですね。これはライフサイクルということになる。考えてみたらそうです。若いときは皆さん、楽しいことがいっぱいあるでしょう。恋愛したり、仕事のことで悩んだり、あるいはスポーツをしたり。その割にそんなに社会のことを決めるときに声はかかりません。適当についておいでという感じの部分があります。

あまり選挙へ行こうというのはそもそもでもないですが、だんだん結婚して、お子さんができて、仕事でも責任が増してくると、どうしても投票に行かないといけないというようになってくる。つき合いで頼まれたとか、子供の問題でこれは考えないといけないと思ったとか、そうすると、だんだん人間は変わってくるんですね。投票に行くようになります。行くようになると、それが当たり前になってくる。大体60歳というのが社会の中で一番中核というのか、責任ある立場に立つので、60歳がピークです。そこから今度は定年になるでしょう。リタイアします。そうすると、だんだん無責任になると言う怒られますが、解放される。他方、体がだんだんしんどくなってくるんですね。そうすると、行きたいけど行かないというふうにおじいちゃんたちは

図3 20歳代の投票率の推移（衆議院選挙）



なってくる。人の一生というのは必ずこういう形になります。これが図1と図2です。

だから、心配ないかなという気もするんですが、そこで心配ないと言ってしまったら、今日はこの場で解散ということになってしまうので、そういうわけにもいいかないですね。実はそういうわけにはいかないというのは理由がありまして、図3を見てください。これを見ていただくと、今度はその時代その時代の20歳代の人だけの投票率を過去30年間ずっと追いかけてみたんです。そうしますと、1980年、20歳の人たちでも3人に2人は投票に行っていた。実は私はこの世代です。僕の世代はまだ投票に行っていたんですが、ここからどんどん投票率は下が

りまして、最近ちょっと持ち直していますけれども、2003年ぐらいには25〜26%もこの25年間で投票率が下がったわけです。いかにどんな若い人たちが投票に行かなくなったかということがわかります。深刻です。だから、みんな大騒ぎする。日本だけではありません。どこの国でも今、若い人は投票に行かなくなっていて、結構問題ですが、その中で日本は下げ幅がもの凄く大きい。この点を確認したいと思います。そうすると、今20歳代だけを見なければ、ほかの年齢層はどうか。今度は全部の年齢層についてやってみました。暇だともうかもしれないませんが、やってみました。そうすると、不思議なことに1990年代に投票率は日本中で下がる。すごく下がるんですが、その中で特に若い人の落ち込み方はかなり激しい。図4が衆議院、図5が参議院です。衆参で時代の書き方がちよつとずれています、いずれにしてもわかることは、90年代、日本中の投票率がすごく下がった。その意味では20歳の、若い人だけの責任ではないんですが、特に若い人たちの投票率がこの時代にすごく下がったということがわかっていただけたと思います。

これをどのように考えたらいいか。僕らの世代はもういいです。おじさんになりま

図4 衆議院選挙 年齢別投票率の推移

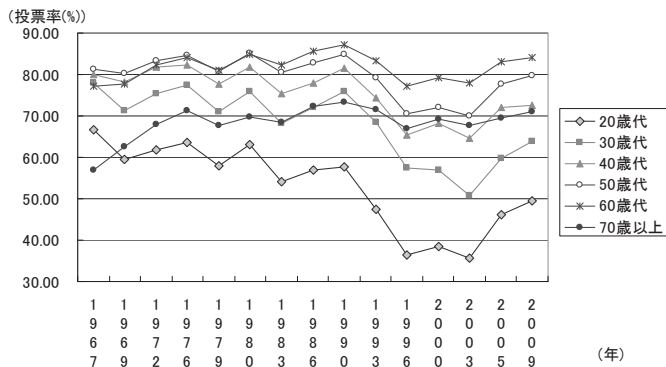


図5 参議院選挙 年齢別投票率の推移

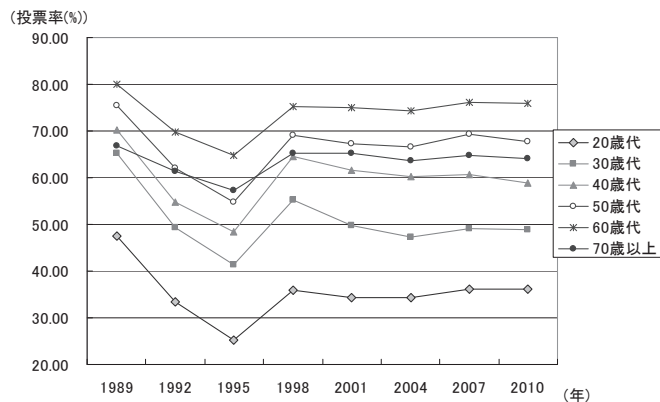
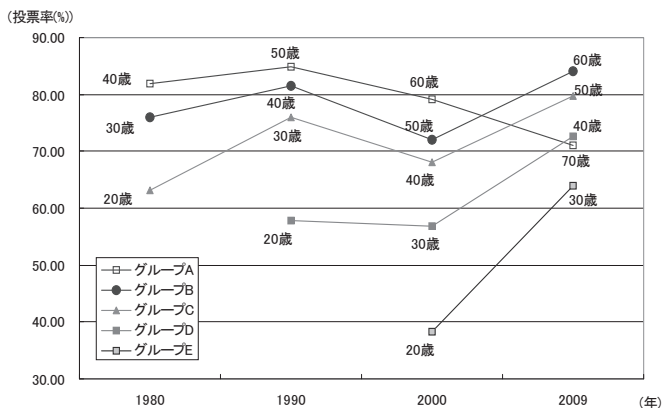


図6 年齢集団ごとの投票率推移（衆院選）



したから。皆さんのような若い世代はどう考えたらいんだろうか。今度は世代という観点で見ようというのが図6になります。これは特定の世代をずっと追いかけてみました。皆さんの世代は恐らく一番下のグループEの線だと思うんですけども、その上のグループDは1990年にデビューした人たちです。更にその上のグループCが80年代にデビューした人たちで、これは僕らです。

見てもらおうと、だんだん年齢とともに投票率は上がっていくんですが、今の若い人たちの特徴は2つあります。1つは、デビューのときの投票率がすごく低いということです。出発点が低い。だから、年とともに投票率が

どんどん上がるんですが、そもそも出発点が低いから、皆さんの世代は恐らく60歳になつたときにもそれほど高いところに到達できないのではないかと。

それから、皆さんよりちよつと上の世代の人たち、今30歳前半の人たちの世代は、特に最初の10年間で投票率がアップしなかつたんですね。あの世代は非正規雇用が増えてもの凄く就職不安が多かつた世代ですが、どうもあの辺から停滞が始まりまして、その世代、今の30代前半の世代は10年間ちつとも投票率が上がらなかつた。皆さんの世代は、投票率はぐんぐん上がっているんですが、出発点が低い。このあたりが今の若い人たちの低投票率の原因になっています。90年代の投票率が低下した悪影響、そのネガティブな影響がずっと今も尾を引いているということです。だから、何か手を打たないといけない。そういう状況になっているというのがわかっていただけるのではないかと思います。

90年代、何で投票率が下がったかという話ですが、幾つか理由が考えられます。1つは、選挙制度が変わつたことです。日本は中選挙区制から小選挙区制に1993年に移行しましたが、大体選挙制度を変えると、これは世界中どの国でも共通して言

えるんですが、一時的に投票率は下がる。もう1つ、日本の場合は、政党が大きく変わりました。自民党がずっと強い時代が続いていたんですけども、あの時代から新しい政党ができるようになって、しかし、新しい政党はあまり長続きせず、右往左往しました。そうすると、自分の好きな政治家はどうなったんだろうとか、自分の好きな政党がなくなってしまったという人がいっぱい出てきて、そうすると、投票はどうすればいいの？という話になってきます。そのあたりも影響しているのだろーと思えます。まだまだそれだけでは原因は突きとめられていない気もするんですが、90年代は投票率が下がったというのは確かです。

今後の課題ですけども、皆さんにぜひ考えていただきたいのは、皆さんの世代も含めて、それにこれからの人も含めてですが、20歳代の投票率を底上げして欲しいというのが、1つ課題としてあると思います。もう1つの課題は、20歳から30歳に上がっていく最初の10年、ここで投票率を上げる。これは皆さんの世代では既に成功しているわけけれども、これを今後も続けるようにしていこうと思うんですね。

割と小学校の出前講座とか、最近やるでしょう。あれは何で出前講座をやるかとい

うと、まさにこの観点です。若い人の投票率、20歳のときの投票率を上げるためには、小学生、中学生に手を打っておかないといけないというので、そういう形になりつつあるのではないかと思います。

皆さんの世代の特徴はもう1つあります。それは何かというと、もの凄く差が激しい。選挙に行くときは割とワツと行くんですが、行かないときは全然行かない。皆さんの身の回りでも考えてみてください。2005年、2009年のときは結構話題が盛り上がったのではないですか。おうちで、あるいは学校や職場で友達と、そういう選挙の話をしたのではないかと思うんですね。ところが、今年の統一地方選挙で、周りで選挙の話をした人はいますか。あまりいいのではないですか。割と昔は「関心のない人はいつも関心がない、関心のある人はどんな時でも関心がある」というふうに安定していたんですね。皆さんの世代は割と激しく動くんですね。

実は2005年と2009年の衆議院選挙の投票率は割と高目です。なぜあの2回だけ投票率が上がったかというと、恐らく皆さんの世代の人たちが投票に行ったからだったんですね。都市部で10%ぐらい高い。ところが、これが参議院選挙になると、

全然行かないので10%もガクッと下がってしまう。皆さんの世代の動向が今、投票率、特に都市部の投票率を決めていると言っても過言ではない。

では、何でそんなに行ったり行かなかったりその差が激しいんだろうかというのが、皆さんの世代の特徴だし、ちょっと疑問というか、面白いところです。そういうことを次に考えてみようかなと思います。若年層の投票行動についてということで、若い皆さんの投票行動の特徴をかいつまんで指摘しておきたいと思います。

しかし、そもそも皆さんに限らずですが、日本の有権者は割とうつろいやすいというか、薄情なところがありまして、諸外国に比べると日本人はどうも熱い人が少ない。日本の有権者の特徴は、温度が低いというか、体温が低いというか、割と薄い。色々な政党を支持してみるんですが、それほど強く支持しようとも思わないし、政党の支持を変えてもいいと思うし、あるいは、例えば、「私は○○党支持です」と答えていた人が、半年後に同じことを聞かれたら、「いや、私は支持なしです」と言ってしまうたり、強い支持が少ないというのが日本の特徴ですが、とりわけ若い人でそれが激しい。ヨーロッパやアメリカでは、同じ政党を支持するという気持ちが強いか、

熱心な支持者が多いんですが、そのあたりは日本の特徴で、特に若い人が激しいわけ
です。

それをもうちょっと考えてみましょうというので、今度は有権者をタイプ分けして
みました。その場で手を挙げてもらったりしたいんですが、皆さんは、まず自分の選
挙区というか、自分の都道府県の政治家の名前をフルネームで3人以上言えるという
人はどれぐらいいますか？衆議院、参議院、知事、県会議員、全部あわせていいです。
無理に挙げろと言いません。3人も知らないという人は？例えば、それは政治的な
関心がある程度示している。3人以上知っている人は、割と政治に対して関わりが強
い人です。あまり知らない人は、関わりが弱い。

あるいは、投票に行くのが権利だ、義務だと言われたときに、賛成という人はどれ
ぐらいいますか？そんなの、棄権するのも自分たちの権利だと思う人は？棄権して
もいいじゃないか。そうすると、棄権してもいいじゃないかというのは、あまり関わ
ろうという気持ちという意味ではやや弱いですね。

こういう質問を幾つか繰り返しますと、皆さんがそれぞれ政治に対してどれぐらい

心理の上で、心の中で関わっていいかと思っっているかというのが出てくるんですね。

ここは割と若い人の中では関わりを持つ人が多いと思うんですが、仮にさっきの一番簡単な、政治家の名前を3人知っている人は心理的関与度が高い人としみましょう。

そうでない人は低い人ということにとりあえずしてみましよう。それで1つグループ分けができるでしょう。

そうしたら次に、政治に対する不信度というのも聞いてみたいんですね。皆さん、正直、自分の1票はあまり大して意味がないと思うという人はどれぐらいいますか？何万人も投票するんだから自分の1票ぐらい、結局、意味がないと思う人は？——それはいませんね。それに対して、そうはいつでも、投票所へ行って帰ってきたら心が晴れ晴れする、ちょっと充足感があるという人はいますか？やはりその違いがあつて、それは政治に対するある種の不信度を表していると考えてみてください。あるいは、政党や政治家は自分たちのことを考えてくれていると思いますか？どうせあの人たちは自分たちのことしか考えていないだろう。これはあまり聞くとよくないかもしれないので手を挙げてもらいませんが、心の中で、あいつらは自分のことばかり考えやが

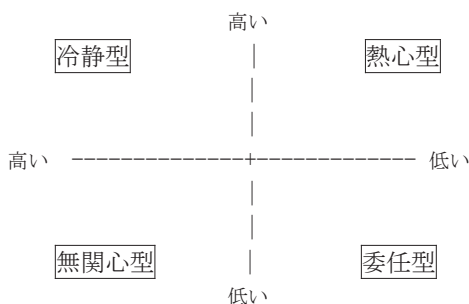
ってと思っている人は、政治に対して不信度が強いでしょう。だけど、そんなことはない、政治家の中にも日本のこと、地域のことを思っている人だっているじゃないかと思う人は、やはり信頼度が高いんですね。そうすると、皆さんも自分で政治に対して不信度が高いか、低いかというのがわかると思うんです。

そうしたら、今2つやりましたね。関わりが強いのか、弱いのかということ、不信度が高いか、低いか。そうしたら、皆さんは自分のポジションが何となく位置づけられますね。

その図7を見てみてください。心理的関与度が高く、政治不信度が低いというのは、例えば熱心型と名前をつけようと思うんです。皆さんは自分で大体どの辺か考えてみてください。

大学でいつもやってみると、皆さんの世代というの

図7 心理的関与度



は、おおむね政治に対する不信度は強い。あまり不信度が少ない人は、どちらかというと、いないんですね。そうすると、冷静型か無関心型かというタイプのどちらかになるのではないかと思います。この冷静型の人の特徴は、この人たちは割と政治に関心があつて、色んなことを考えるタイプの人です。マニフェストは読むというタイプです。マニフェストを駅で配っていたら、ついもらつて読んでしまうタイプが上のほうです。それに対して、政治に対してふだんあまり興味がない、テレビのニュースでちよつと見るぐらいですという人は、無関心型です。大体今の若い人はほぼこの2つのどちらかではないかと思っています。

とりわけ若い人が多いのが無関心型です。もちろんお年寄りの中にも無関心型に近い人はいるんですが、無関心型の人を集めてみたら、100人いたら大体40人ぐらいは20歳代で、30人ぐらいが30歳代です。この人たちは人口の1つ大きな塊になっているんですね。この人たちの特徴は、ふだん選挙に行かない。基本は行かない。だけど、時々行く。どういうときに行くかというと、面白いときに行く。

面白いときというのはどういうときかというと、2005年の小泉さんのときです。

あれは、皆さんはもう投票権はありましたかね。あれは面白かったですね。毎日毎日テレビでやって、ホリエモンが選挙に出てきたり、あとは色んなマドンナ候補とか、いっぱい出てきて毎日毎日おもしろかったです。それから、2009年、あれも投票率が高かった。面白い選挙だったんですね。ちょっとおもしろさの意味が違って、政権交代がいよいよ実現するかもしれないという歴史的な選挙で、歴史の一瞬に立ち会ってやろうという気持ちが働いた選挙です。ああいうときは投票率が上がる。

ところが、参議院選挙は何かよくわからない。参議院議員に会ったことがないですからね。衆議院議員は時々ありますが、参議院議員というのは、誰？という感じがありますから、何の選挙だろうと。いや、参議院も重要です。参議院と衆議院の意見が違うから法律が全部とまってしまうので、もの凄く参議院も重要ですが、その割にみんな参議院のことを知らない。ふだんあまり関心がない。参議院というのは大体、行く人はガス抜きに行く。衆議院で自民党が勝つでしょう。そうすると、参議院のころに腹が立つ。参議院選挙に行つて民主党に入れてやろうかと。2009年は逆です。民主党が勝つでしょう。そうすると、2010年はそろそろ民主党のあらが見えてく

る。鳩山さんは変なことを言っているぞと。そうすると、参議院へ行つてガス抜きをしてやろうかというのがある。それはともかくとして、参議院選挙はあまり面白くない。ちよつと不満を表明するぐらいだから投票率は上がらない。

皆さんは大阪は関係ないですが、大阪の最近の情勢を御存じでしょうか。大阪は今面白いことになっていまして、橋下知事がほえる。ほえると面白いから、みんな聞いてしまうんですね。橋下さんがワツと言うと、大阪だけ投票率が上がる。この前の統一地方選挙は、日本中47都道府県あるでしょう。東京都とかがやっていないから実際は44の道府県で選挙したんですけれども、44のうちの42は前回に比べたら投票率が下がった。上がったのはどこかというと大阪だけ。奈良が微増です。なぜ奈良が微増かというのはちよつとわからないんですが、大阪だけ投票率が上がった。あれは橋下さんが面白かったからです。

平松さんという大阪市長も、もともとニュースキャスターですから、橋下VS平松というのものはもの凄く面白いんですね。今度、僕が期待しているのは、橋下さんが大阪市長になって平松さんが大阪知事になったらもつと面白いのになあと思って、ちよつ

と期待しているんですが。そういうことがあって、投票率が上がる。

それでは何で投票率が上がるかというと、面白いぞということになると、無関心型の人たちがワッと選挙へ行くからです。逆に言うと、無関心型の人たちの特徴は何かというと、ふだんは選挙に行かないけれども、何か目立つわかりやすい争点があると選挙に行くんですね。ここのところをどう考えるか。選挙に行ってくれるだけいいと思うか、あるいは、同じ選挙に行くならちゃんともうちょっと考えて行ってほしいと思うか。できれば、欲を言うと、最初は、いい機会だから導入として面白い選挙というので来てもらったらいいですが、その次はちよつと勉強して来てねというのが理想です。なるべくそういうふうに、無関心型の若い有権者を、もうちよつと物を考える有権者になってもらうように、長期的には持っていきたいと課題としては思うわけです。

皆さんはあまり引越しはしたことがないですか。私はあるときから突然、やむなく引越しを余儀なくされることが何回かありまして、10年間に3回か4回、引越したことがあるんですね。

その時に私はどうやって引越し業者を決めているかというと、面倒くさいので、テレビで実は決めているんです。赤井英和さんという人がいますね。僕はあの人が好きなので、あの人がやっているテレビCMの阿里さんというのがよさそうだと思って、僕は阿里さんに電話して引越したんです。

ところが、この話を大学で僕の知り合いというか、僕の後輩の先生にしたら、バカにされまして、「あんたはアホか」と怒られたんです。彼もちょうど同じころ引越しをしたので、「そうしたら、君はどうするんや。引越し業者はいっぱいいるけど、どうやって選ぶんや」と言ったら、「そんなもの、見積りを最低でも5、6社は集めて、きちっと比較考量して決めてください」と説教されました。

それで、「ああ」と思ったのは、皆さんも引越するときに冷静に5、6社、見積りを集められたりする人は冷静型です。この人たちは心配ありません。僕みたいにテレビで阿里さんやハトやと言っている人は、これはもうちょっと勉強したほうがいい。しかし、今の若い人は僕みたいなタイプの、パツと印象で決める人が多いので、そここのところを何とかしたい。そんな話をさっきしたかったわけでありまう。

今までは現状でした。次に対策編ということで、今後のことをどう考えていくか、その対策についてお話ししたいと思います。もちろんそんな対策はあるわけがないと言ったら怒られますが、実際にはないです。地道にやるしかなくて、これという答えはないんですが、それでもノーヒントで考えるよりは手掛かりがあつたほうがいいかなと思ってお話をします。

そもそも何で人間は投票に行くのだろうかということを考えてみたときに、これは結構世界中で謎ですから、色んな研究も多いんですね。何で投票に行くのかという理由を説明するのに、色んなことを色んな人が言っているんですが、大雑把にまとめると3つにまとめられます。その3つのうちのどれかです。

1つは、人に勧められたから行く、というものです。これは社会動員仮説という名前がついていますが、要するに、人に勧められたから、強制されたから行くという話です。2つ目が、心理的動機仮説というんですが、これは、人間はそうやって人に勧められるということもあるけれども、やはり内発的に行動を起こすから、内面に行きたい動機がある。その動機のある人が投票に行くというのが、2つ目の考え方です。

3つ目の考え方は、人間は内面から行動を起こすんですが、それは損得勘定が絡んでいるからだという考え方です。

これはまた卑近な例で申し訳ないけれども、皆さんは今日この会場に来る前に多分お昼御飯を食べてこられたと思うんです。私も駅前で食べてまいりました。そのときにどうやってそのお店を、あるいは食べ物を決めましたか？あるいは、ふだん職場や学校でお昼を食べようと思ったときに、何を食べるか、どうやって決めるか。例えば、きょうはうどんを食べようと思って来ても、友達に会ったら、「カレーを食いに行こう」と言われて、「ああ、そう、そう」と言っただけでカレーを食べに行ってしまうということはありませんね。これは1つ目の働きかけというものです。2つ目は、「いや、おれは断固、うどんが食いたい」と思って、「うどん、うどん」と思って、うどんを食べに行く。広島に来たからには絶対お好み焼きを食うぞ、行列を見てでも、何としても、遅刻しても構わないから絶対食ってくるぞという人もいます。これは心理的動機仮説です。ところが、お好み焼きを食べようと思って行ってみたら、思ったより高かったの、隣のうどん屋だったら300円は安いから、うどんにしておこうと思う人もいます。

それは得したほうがいい。あるいは、この行列に並ぶぐらいだったなら空いている店のほうがいい。そこは損得勘定でお店を決めるわけです。

我々は大体何でも行動を起こすときは、この3つのどれかです。人から勧められるか、自分がやりたいことがあるか、損か得かで得するほうを選ぶか、大体3つに1つです。

これは選挙にも応用がききます。みんなを投票に行かせようというのは不遜な言い方かも知れないですが、投票に行ってもらおうと思ったら3つぐらい考え方がある。1つは、「一緒に行きましょう」と、とにかく声をかける。これは最初のほうです。あえてティッシュを配ったりもします。世界に目を広げると、法律で無理やり行かないといけないという国も結構あります。オーストラリアでは、行かなかったら罰金です。罰金を払うのが嫌だからやはり行きます。ちよつとかわいいのはイタリアで、今は法律が変わったんですが、この前までイタリアでは選挙に行かないと市役所に名前を張り出すという罰則がありました。別にそんな罰則は痛くもかゆくもないですが、ちよつと格好悪い。そういう罰則でやってみたり、世界にはそういう国が幾つかあり

ます。それも含めて、無理に連れていく。あるいは、声をかけて連れていく。認知・啓発というので声をかけるといのは1つの考え方です。

2つ目の内面というのは、動機を育てないといけないわけです。動機を育てるといふのは重要です。人間は、動機がわからないというのとは一番不安です。よく電車の車内で、「携帯電話がうるさい」と言って怒り出す人がいるでしょう。僕自身もムツとするときはあります。何で携帯電話があんなに腹が立つのか。考えてみたら、車内で大声でしゃべっている人は他にもいっぱいいるわけです。何で携帯だけ腹が立つのかというと、あれは会話の一方が聞き取れないから、何を言っているか、わからないわけです。何でこの人はこんなことを言っているのか。「駅前で3時に待つとけよ」と言っているおじさんがいるわけです。だけど、何で駅前で3時なのか、わからないから腹が立つ。2人がいて、おじさんとおばさんが会話をしている、「駅前、3時な」、「ああ、私、買い物に行ってくるしな」という話をしていたら、「そうか、この夫婦はあそこで落ち合うつもりだな」と思ったら、そんなに腹は立たない。人間は動機がわかると、結構許せることは多いんですね。

どうでもいい話ばかりしますが、みなさんは見ないかな。火曜日や土曜日の夜9時から2時間スペシャルで、「家政婦は見た」とか、「タクシードライバー何とか」とかあるでしょう。あれは大体一番視聴率が高いのが10時40分なんですって。何で10時40分の視聴率が高いかというと、犯人が大体がけとかに追い詰められて、そこで早く逮捕すればいいのに、逮捕する前に犯人が必ず動機を告白する。みんなあそこが見たい。だから、あそこの視聴率が一番高い。犯人の告白が終わったら、ずっと視聴率が下がる。肝心の一番いい逮捕のシーンは見ない。みんなそんなものです。動機を知りたい。それほど動機というのは大事です。

だから、選挙に行くのも動機を育ててやればこっちのものです。そのためにはあの手この手です。小学校へ行って小さい間から、選挙は大事だなと、教え込んでしまえばいいんです。これは長期的ですが、教育でやるしかありません。家庭での話し合いも大事です。意外と家で話したり、友達と話したりするというのは重要です。なかなかそこに持っていけないんですけれども、これも大事です。

3番目が、損得勘定です。実は最近、社会全体が、長期的に見ると、世の中はこっ

ちのほうにどんどん流れてきています。ですので、合理的に損得、コスト・ベネフィットということで説明するというのが、多分今の世の中には合っているのではないかと思います。そのためには既に色んな手が打たれています。

皆さんは若いからあまり関心がないかもしれないけれども、例えば、今、期日前投票というのがあるでしょう。期日前投票はほとんど理由が要りません。行きたかったら行つて勝手にやればいい。昔の不在者投票は大変でした。用事があるといったら、何の用事かを一々言わないといけなかった。言つても認めてもらえないときがあつた。「そんな」と思うぐらい腹の立つことが、結構昔はあつたんですね。今は自由になっている。あれは投票のコストをすごく下げている。

それから、今は投票は8時まで行けるでしょう。だから、遊びに行ったり、サークルに行ったりして帰ってきてても、投票へ行ける。あれも昔は6時だったわけです。6時だと行かれないという人が多いので延ばした。それはコストを下げています。

今はどんどんそういう投票のコストを下げる方策がとられているんですが、他方で、しかし、コストだけでは成り立っていかないわけで、ベネフィットのほうも増やさな

いといけない。利益のほうも増やしていかないといけない。実際に私が大学で、「君らはどうやったら投票に行くんだろうね」と雑談すると、学生がみんな言うのは、「弁当を出してください。弁当が出たら、僕は投票に行ってもいいですよ」とかね。「どんだけ偉いんや」と思うんですが、よくそういうことを言う学生がいます。やはり利益が大きいです。そういう直接的な利益です。しかし、弁当を出すわけにはいけないから、選挙に行つて政策的に何か利益があるということを知ってわかってもらわないといけないわけです。

選挙のときに若い人に、選挙に来てください、投票してくれたらきつと皆さんに役に立ちますよという、このことが大事です。実は政治家の皆さんは結構、若い人に向かって今色んな語りかけをしているんですね。皆さんが自覚しているかどうか、わからないんですが。私は最近、神戸市と兵庫県、僕の地元のほうで調べてみたんですが、統一地方選挙の過去20年ぐらいの選挙公報を繰ってみると、若い人向けの政策は着実にふえています。ところが、それがなかなか届かない。そこが問題です。

実際にどんなことをして調べてみたかというのを、簡単ですが、紹介してみようと

思います。皆さんが見ているかどうか、わからないですが、選挙公報があります。あの選挙公報からの印象を学生に評価させたいんです。3つの観点で評価してもらった。「若者の利益を代表している人だと思えますか」、「この人に好感が持てますか」、「この人は政治家として期待できますか」というこの3つの観点で、5点満点で採点してもらったんですね。

一方で、その候補者が何を言っているかというのは、僕のほうでカウントしてみました。特に若い人向きの政策をどれぐらい言っているかというのを、3つの項目でチェックしてみたいわけです。高等教育——高校、大学、専門学校について、あるいはリリーターやニートの人の就労支援について語っているかどうか。若い子育て世代について育児を支援するような政策を言っているかどうか。もう少し上の30代に入ると子供が学校へ行ったりしますから、小学校の子供を持っているお父さん、お母さんに向かって何か言っているかどうか。そうやって見たんですね。

そうしたら、面白かったのは、学生さんはどんな種類でも若い人向けの政策を言っている人のことを、ちゃんと若者を代表している候補者だと正しく認識できるんです

ね。当たり前だと思うかもしれませんが、じっくり読ませたのではないんです。1人30秒ぐらいでパツと見せていって、直感的に判断させたんですね。ところが、直感的な判断でもちゃんと、この人は若い人向きだというのは、学生さんはみんな理解した。ところが、利益を代表していることは認めるんですが、では、その人に好感を持つかというと、またそれは別みたいです。特に育児支援や学校教育を熱心に言う候補に大学生はほとんど好感を持ちませんでした。大学生が好感を持ったのは何かというと、就労支援、就職といった自分の身近な利益のことを考えてくれる人のことだけ高評価したんですね。この辺がちよつとギャップがあつて、面白いところです。

若い人というのは次から次に必要が変わってくる。皆さんの世代だと、とりあえず仕事に就くかどうか、いい仕事かどうかということがまず気になるかもしれない。ところが、結婚するとなると、子供のことが気になりますし、学校に行き出したら学校のことが気になるし、若い人の政策に対する欲求というのは短期間で変わっていく。このあたりが難しい。政治家の側も幾ら一生懸命頑張っても、ちよつとの層しかとらえられないんですね。

考えてみてください。人間は20歳から35歳まで15年間あるでしょう。60歳から75歳まで同じ15年間でしょう。ただ、20歳から35歳の欲求というのはいろいろでしょう。仕事のことあれば、教育のこともあるし。ところが、60歳から75歳の15年間、人間の言っていることはみんな一緒です。介護と年金です。それしかない。そうすると、政治家はどうしてもお年寄りのほうに向いてしまう。投票率も高いし票を集めやすい。そっぽ向かせたらいけない。こっちを向けというふうに皆さんのほうで政治家を引っ張っていかないといけないわけです。「聞いているよ、僕らは」「見ているよ、私たちは」というふうに言っておけないと、政治家の皆さんは票が欲しいですから、票のあるところに行ってしまう。行かないようにしないと、いけないと思います。

そういう意味では、皆さんに政策を見抜く力をも身につけてもらいたいと思うわけです。ここからボートマッチの話を少ししたいと思います。最近こういう政策を判断するための支援ツールというのがネット上に色々あります。これらに共通して言えることは、選挙に行く前に政策のことを知ってもらいたい。そうすると、どういう投票をするかあなたの望む政策が実現できるかを教えてくれる。そういう支援ツールのサイ

トが結構たくさん開かれています。その1つを紹介します。これ以外にも、例えば、「Yahoo! みんなの政治」とか、あるいは毎日新聞のやっているポートマッチとか、色んなのがあります。実は私も関係しているので、これを紹介します。

これはYOMURI ONLINEという読売新聞のサイトの中にあるんですね。今は休止中なのですが、おうちへ帰られましたらYOMURI ONLINEでポートマッチ、あるいはYOMURI ONLINEでなくもいいですが、Googleなどで「日本版ポートマッチ」と検索してくれたら、すぐに見ていただけたらと思います。

日本版ポートマッチとは何か、ということですが、あなたの政治的立場や意見に最も近い政党を知ることができるというサービスです。サイトの中で25個ぐらいの質問が次々あって、それに皆さんが賛成、反対という意見をクリックしていくんですね。そうやって25問終わると、あなたに一番近い政党はここです、というのを教えてくれます。これをやってみてください。今は残念ながらできないから次の選挙のときにやってもらいたいんですが、なかなか面白い。え?と思うようなことがあります。

私は学生としゃべりながら、あまり考えないでやっていたんです。そうしたら、「あ

なたに一番近い政党は『たちあがれ日本』です」と言われたときには、立ち上がられないぐらいシヨックでした（笑）。え?と思つて。別に揶揄しているわけではないんですが、平均年齢がかなり高い党ですから、おいおいと思ひましてね。あれは、健康診断で「あなたの動脈年齢は70歳です」と言われるのと同じようなシヨックがあります。

これが面白いのは、逆に自分が支持している党でもいいし、嫌いな党でもいいんですが、特定の党をあらかじめターゲットに決めて、どうしたらその党に近くなるかというので、だれが一番近いかというのでゲームになります。例えば、○○党に近いのを選んで、一番近い人が勝つとか、そういう遊びもできます。実際に僕は学生とやってみたんですが、なかなか難しい。例えば、特定の党を言うのはあれですが、日本共産党というのは割と立場をはっきりされていると思うんです。そう思つて比較的簡単かなと思つてみんなで共産党に一番近いのをやってみようと言つてやつたんですが、これがなかなかたどり着かない。難しいものです。

色々やっているうちに色んな党の立場が結構わかったり、あるいは、考えているう

ちに、この問題を考えたことはなかったけど、実は自分の意見がこうなのかということとがわかってきたり。あるいは、面白いのは、例えば、外交問題と別の問題と、僕の中では2つは全然別の問題だと思っていたことが、意外とリンクしていたり、色んなことがわかってきます。なので、是非やってみていただきたいと思います。

これはもともとヨーロッパではやっているもので、オランダやドイツでやっていたのを日本に輸入したんです。ヨーロッパの本家とおつき合いがあるんですね。メンバーで五十嵐さんという女性の方がいて、この人がオランダに留学しているときに知り合った方がこのボートマッチをやっている人で、その本家からお墨つきを得ています。

我々はちゃんと根拠を持って科学的に、結構手間暇をかけてやっています。まず前の選挙の公約を分析して、今、世の中で話題になっているのはこういう公約で、この公約についてはこの党はこういう立場だろうということを、全部データをつくるんです。それで、まず各政党にアンケートを出して、「こういうふうに分析したけど、いいですか」と確認のお手紙を出します。最初のころはみんな冷たかったですが、さすがに最近、手のひらを返すように対応がよくなりました、みんなすぐお返事をくだ

さいます。

そうこうすると、今度は選挙が近づいてくると、みんなマニフェストが出てくるでしょう。マニフェストを追加分析して、またもう1回作って、もう1回、政党に「これでいいですか」というのを聞くんですね。そして「いいですよ」と言ってくださったら、そのデータを基にプログラムしてコンピュータに入れてボートマッチをやっているんです。

さっき言ったように、意外と楽しめるので。もちろん自分の意見に近い党を知るということでもいいですし、それ以外の日本の政策状況全般を勉強するというのにも役に立つので、やってみたらどうかと思います。

あとは、「Yahoo! みんなの政治」とか。あつちはこのいう形ではなくてもっと自由度の高い形で政策が勉強できますから、是非やってみて、流行らせてみてください。

残念ながらこれを皆さんが何回やっても僕らには一銭の経済的利益も実は発生しないのが難点で、みなさんが1回やるごとに僕らたちのところに10円でも入ってきたら莫大な収入になるんですが、それはないので安心してください。純粹に楽しんでいた

だければと思います。

ボートマッチのことはもし何か興味があつたらお尋ねください。

もう1つ、ボートマッチをやっている人は、見ていただくとわかるんですが、この中国・四国に縁がある人たちでやっています。1人だけ静岡大学ですが、あとは、高知大学、香川大学、神戸大学で、西日本に土着のボートマッチなので、ぜひやっていただけたらと思います。

最後に結びの話です。今日お話したことは色んなことがありました。これという答えもないんですが、今後どういうふうに考えたらいいか。啓発活動を、啓発にしてもいいですし、あるいは、皆さんが地域に戻ってなさるような色んな活動も含めて、評価という観点を入れてみてはどうかというのを最後に1つ提案して終わりにしたいと思います。

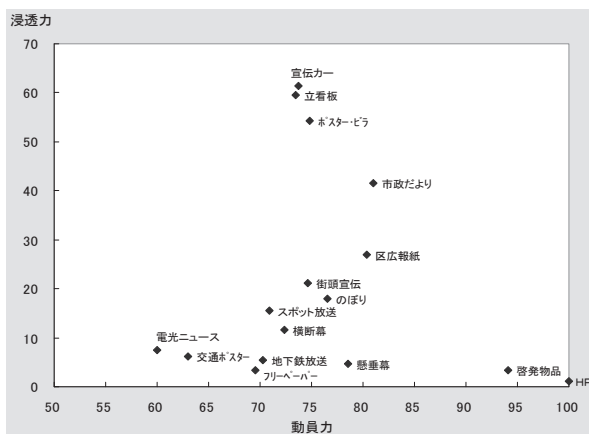
これ（次頁図8）は統一地方選挙後の、大阪市選挙管理委員会の調査ですが、啓発活動の検証をやってみたことがあるので、それを例にして御紹介したいと思います。

縦軸に浸透力と書いているんですが、これは実際に投票に行った方を分母にして、そ

のうちこういう啓発手段を見たり聞いたりした人の割合をパーセントにしたものです。他方、動員力という横軸の概念は、その啓発を見たり聞いたりした人のうち、実際に投票に行かれた方の割合をやはりパーセントにしてみました。これを組み合わせでグラフにしてみると、結構それぞれの啓発手段の性格が明らかになります。

例えば、啓発物品というのは見てくさい。啓発物品は右下隅にあります。これはどういうことかというと、啓発物品をもらった人は、かなりの確率で投票に行かれるところだが、投票に行った人のうちのごくわずかな人しか啓発物品を見ていない。それ

図8 統一地方選挙2007における啓発活動の効果



はそうですね。駅前で配つても、ティッシュを1000個配ったら終わりでしょう。その1000個をもらった人は投票に行ってくれるんですが、その1000個をもらわなかった残りの何十万人の人たちは、そもそも知らないわけです。そうすると、このティッシュ配りというのは、もらった人にはもの凄く効果はあるけれども、トータルで見れば効果は小さいということです。逆に、宣伝カーというのが今度は上のほうにあるでしょう。あれは車を走らせていると多くの人の目には触れるんですが、触れるだけで、それを見たからといって人間は態度を変えないという話です。

それぞれ長所、短所があるわけですから、漫然と活動するのではなくて、それぞれの活動がどういう効果をどの程度どの人たちに持つかということを考えながらやっていただくといいいのではないか。こういう視点があると、やりがいというのも変ですが、手ごたえみたいなものが出てくるのではないかと思います。

時間が来ましたので、色んなことを言い過ぎましたから、実のある話だったかどうか、わかりませんが、何か1つでもヒントにしていただけたら、私としては大変幸せに思います。長い時間、ありがとうございます。私のお話はこれで終わります。(了)

若者と選挙～ivoteの活動を通して～

学生団体 ivote 創設者 原田 謙介

平成23年7月28日 於 新潟県新潟市

皆さん、初めまして。先ほど御紹介にあずかりました学生団体ivote代表、原田謙介です。よろしくお願ひします。

まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。原田謙介といひます。「謙」の字が、新潟県だと上杉謙信さんと同じ「謙」ということで、勝手にうれしく思ひながらこの場に立っていたりもします。地元は岡山県なんですけど、中学・高校と愛媛県のほうにいたり、今は東京のほうで大学に通っています。趣味はサッカーと、バックパッカーで世界の色々な国をリュックだけ背負って回るのが大好きです。

今日はまず、皆さんにいろいろ問いを投げかけながら進めていきたいと思います。

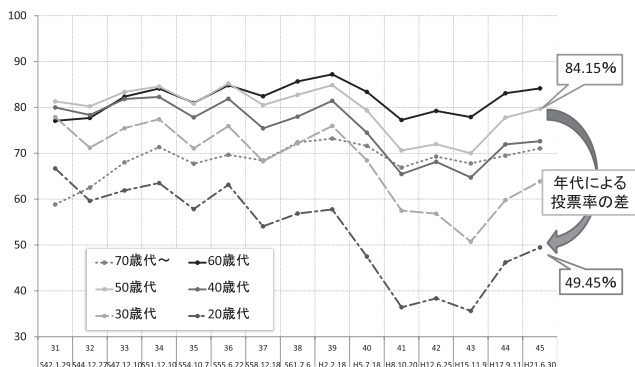
今日のこの講演会も、皆さん方明推協という団体もそうだと思うんですが、日本の投票率を上げる必要があるということでの集まりだと思います。ですが、今日は「本当に投票率を上げる必要があるんですか？」という問いから入ってみたいと思います。

例えば、2009年の衆議院議員選挙。政権交代があつて、すごく盛り上がつて投票率もぐつと上がった選挙だと思うんですけど、投票率が69・28%。これは全国の全年代の投票率なんですけど、69・28%でした。じゃあ、2008年のアメリカ大統領選挙。オバマ大統領が選ばれたときの大統領選挙で、日本でもかなりの盛り上がりを見せた選挙だと思うんですけど、この投票率は大体どれぐらいだと思いますか。69・28より高いか低いかぐらいをちよつと頭の中で考えていただいて——答えは63・6%。自分はこの数字を比べたときにちよつと驚きで、まさかあれだけ盛り上がったオバマの選挙のほう投票率が低いなんて思いませんでした。まあアメリカは仕組みがちよつと特殊かなということ、2005年のイギリスの下院議員選挙。少し古いデータなんですけど、イギリスの下院議員選挙というところと衆議院選挙みたいな選挙で、2005年はかなり盛り上がりました。この投票率が74・1%。ちよつと2009年の衆議

院議員選挙よりは高いですけど、そんなに差がないなど。

じゃあ、そんなに無理して投票率を日本が上げる必要があるのか、ないのか。——いやいや、そうじゃないと。自分たちの活動もそうですけど、全体の投票率はもちろん下がってはいけない。維持ぐらいでもいいんだけど、もっとそれよりも何よりも20代の投票率を上げる必要があるんじゃないかなと。うなずいてくださっている方も何人かいらっしゃるんですけど、それはもう本当に必要あるのかなと。何で投票率を上げるのか？低いから？じゃあ何が低いのか？数値が低いのか、何かに対して低いのか。何が低いんでしょう？何に対して？例えば、これは衆

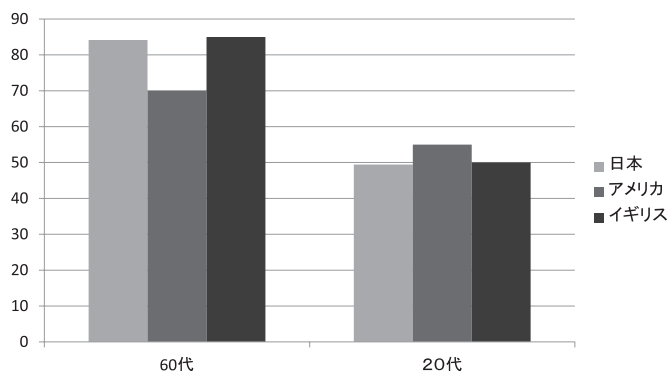
図1 衆議院議員選挙年齢別投票率の推移



議院議員選挙の年齢別投票率の推移のグラフです（前頁図1）。一番下のグラフ、これが20代の投票率。そこから上に順番に30代、40代、50代、60代、70代の投票率です。20代を見てもらうとわかるように、最初の31回衆議院議員選挙、多分50年ぐらい前のときは30代よりはちょっと上だけど、その後はずっと全年代の中で低い、一番下をたどっている。それは、やっぱり20代の投票率が低いんだと、ほかの年代に比べて低いんだと。こんなに差もある。だから、若い人の投票率を上げなければいけない。

いや待てよと。若い人の投票率って低くて普通なんじゃないのかなと。例えば、さっきのアメリカと日本とイギリスの選挙の中で、各選挙

図2 日本とアメリカ、イギリスの世代別の投票率



の年代別の投票率を見えます（図2）。左側のグラフがさっきの日本とアメリカとイギリスの選挙の60代の投票率です。右側のグラフが、同じ選挙のときの20代の投票率。それぞれ左から日本、アメリカ、イギリスの順です。見比べてみると、アメリカは確かに20代の投票率が日本とイギリスに比べて高いです。ただ、イギリスと比べると、そんなに日本の20代の投票率が低いというわけではなくて、そうなると社会の流れとして20代の投票率は低いんじゃないの。もちろん、ほかの世代に比べてもそうだし、低いのが当たり前なのかなと思ってしまふんです。じゃあ今まで何の話をしていたんだという話なんですけど、自分は今「だから投票率を上げる必要がある、その中でも、20代の投票率を上げる必要があるんじゃないか」と思ってvoteの活動をしてきています。

例えば、進む少子高齢化。これはかなり前から言われていますけど、若い人の数が減ってきて、年配の方の数が増えている。世代間格差の問題がある。「僕は年金を払ったら将来本当にもらえるのだろうか？」と同世代の人は本気で思っています。僕自身も多分もらえないだろうなと、どちらかというと思っています。

少子高齢化もそうですし、やっぱり20代の数が少ないとなかなか社会の中に僕ら若い人の意見は届いているのかなと、そういうふうにいる人ともいます。高齢者弱者の構図は常に正しいのか。高齢者の方に保障がいくのは、例えば定年退職された後にその後の生活保障をするとか、病気にかかれたときにそれを保障していく。そういう社会保障だと思うんですけど、ただ、今の失業率が高いことであるとか、就職できない若者がいるという話もよく聞きます。果たして若い人が必ず高齢者の方より強いのかというもあります。

このあたりのことを考えて、僕は今、20代の投票率を上げる必要があると思います。何で上げる必要があるか？——それは、20代の意見がもっともっと反映されるべきだと思っっているからです。少子高齢化でなければ、今から30年後、50代の人も多いけど20代の人がもっと多い状況だとしたら、たぶん僕らは別に社会保障の問題に悩む必要がないと思いますし、世代間格差の問題にも恐らく悩む必要がない。ただ、世界で一番少子高齢化の進んだ今の日本の状況において、今までどおり20代の若い人たちが、社会の接点が少ないからとか、例えば守るべきものが少ないからとかで果たして

投票に行かない状況でいいのかなと思っています。

何か悔しいんですね。自分がこの団体を立ち上げる前に、20代は何でもっと意見を言わないんだと。今行われている政治は30年後、40年後にかなり関わってくる人が多いと思います。その中で、もちろん20代の意見をすべて通せというわけではないですし、それが正しいとも思いません。ただ、その議論の中で、どうも20代とか若い人の話が置いていかれているという思いがすごくあって、せめてその議論の場には入れてほしい。議論の場には僕らの意見が届くようになってほしい。その中で、議論をして戦えばいいじゃないか。そこで本当に意見を言って負けたならしょうがない。そういうところもあると思います。

じゃあ、どうやったら政治に関われるか。その唯一のものが恐らく投票というものだ。20歳になれば誰でもできるものだし、そこで意見を通すのが日本の政治の中において1つの大きな手段だと思います。ただ、俺だけ1人で行ってもしょうがないから周りの人にも、もっともっと同世代の声を上げてもらって、その中で今の自分たちの意見を言うし、将来こうしたいという意見も言う、そういう状況をつくりたいなと

思つて、今20代の投票率を上げる必要があるなと思います。たぶん40年前に僕が大学生だったら、この活動は間違いなくやっていないと思います。今のこの少子高齢化の状況だからこそやらなければいけないかなと思つて始めました。

なぜ若い人が投票に行かないのかなと。例えばこんなデータがあります。選挙に行かない理由というのを、東京都選挙管理委員会が東京都での選挙において各年代について調べたデータです。「仕事が忙しく時間がなかったから投票に行かなかった」これが全世代のトップです。20代も、40代も、50代も、60代も変わらずトップ。ただしちょっと他の世代と20代が違うという部分は、「投票所に行くのが面倒だったから」というのが20代は他の世代に比べて突出して大きかったです。ふむふむ、そういうデータがあるのかということです。もちろんそのデータも正しいと思いますが、*mind*が考えた投票に行かない理由というのもついで挙げてみます。

1つ目、『わからない』。例えば県議員選挙の投票率がすごく低いという話をよく聞きますが、その選挙があつたときに、県議会議員の候補者の人たちの政策はどうなん

だろう、その人たちが何を訴え、何の違いがあるんだとか、そういうのがわからない。さらにいえば、選挙のときだけじゃなくて、日ごろの政治の中で、今県議会で何が話し合われているんだとか、国会の中でどういうことが話し合われていて、それが自分たちにどう関係してくるのかわからない。ならば行かないよねと。わからないから行かないというマイナス的なと、わからない自分が投票に行ってもいいのかという、真面目な方はそれで行かないという方も結構多いです。

次は『興味がない』。今は昔に比べて、本当にいろんなものがあります。インターネットもあるし、例えば色んな遊び道具だってある、テレビだって、色んなものがある。その中で、せっかく24時間しかない時間を割いて政治に興味を持ったり、投票に行くとって単に興味があるのかな。そういう思いである人が、興味がないと。

あと『接点・実感がない』。今、国会で色んなものが話し合われている。新潟県の県議会でもいろんなことが話し合われている。その法律が決まったからって、自分たちに直接関係があるの、それによって何か変わるような実感がないんだという状況だったり、自分の1票によって何か変わるのという意味での実感がないというのもあるか

など。

あと、これはさっきの東京都のデータと一緒になんですけど、やっぱり『面倒くさい』。政治に別に興味が無いわけでもないし、もちろん政治が何か大事なことを話しているというのは何となくわかっているけど、ただその中でわざわざ日曜日、期日前投票の平日も含めて投票に行くのも嫌かなと。Ivoteはこのあたりのことを意識しながら、いろんなイベントをそれぞれやっていきます。

そろそろIvoteの説明に移ります。団体ができたのは2008年の4月なので、3年ちょっとたちました。自分が仲間4人と、こういう20代の投票率を上げる何かをやりたいんだということで仲間を集めて立ち上げた団体です。実は6月に自分は代表を降りまして、今は北という者が代表を務めています。なので、僕は実は今はIvoteメンバーではありません。メンバーの構成なんですけど、今はメンバー19人。全員、関東の大学生で、大学もバラバラで14大学に分かれています、東京、千葉、神奈川のほうの大学もあります。

一応、2つの柱というのがあって、1つ目は、全部学生のみで運営をやっています。運営もそうだし、企画も全部学生のみで話して決めて、何かをやって失敗したり、成功したりという感じです。そして2つ目は、もちろんこれは明推の方もそうだと思うんですけど、政治的に中立で、どの党を応援するだとか、この政策はいいだとか、そういうことは言わないようにやっています。

立ち上げのきっかけですが、2008年のアメリカでオバマの選挙が盛り上がりつつあったとき、アメリカでは若い人が動き出して何か新しい風が吹くんじゃないか、アメリカは変わっていくんだというニュースを日本でもよく報道されていましたが、自分もそんな報道をよく見ました。向こうで、高校生とかが「オバマ」とか「マケイン」だとかで国を変えるんだと議論していると。片や、自分が大学の同級生とか地元の友達とかを見たときに、そんな話をしたことがないというのがちょっと悔しかったというのがあります。自分は日本が好きだし、将来にわたってもいい日本であってほしいと思うし、自分の下の世代に向けても将来が明るい日本だということを残したいんですけど、なかなかこのままでいいのかなと。若い人たちがそんなことを議論しないま

ま月日が流れていつて、政治が動いていつていいのかなという悔しさというのが1つありました。

また、危機感というのもあります。よく言われている少子高齢化だとか、経済が縮小していくだとか、30年後の日本はどんな風になっているんだというのは結構漠然とした不安があります。本当にデータがこうだから危ないとかそういうことではないですけど、何となく将来が危ないんじゃないかなという危機感を持って、もっと何か僕らの世代でも言うことを言いたいし、何か考えられることがあるんじゃないかなと思います。

3つめに、焦りというのがあります。いつまで今の日本がもつのか。例えば、あと30年間は普通にある程度はそんなに深刻にならずに、社会保障の仕組みとか税の仕組みも変わらないまま来るかもしれないけど、40年後だとすごいことになっているんじゃないかな、みたいな。早目に何かやらなければもったいないな、何かやらなければ間に合わないなという焦りがあって、この3つを踏まえて何をしようかなと思って活動を始めました。

いろんな方法があると思うんですけど、僕が行き着いたのは、やっぱり1人でも多くの同じ世代の人、さらには世代を超えてどの世代の人でもいいんですけど、その人たちが今よりも少しでも、ほんのちよつとでも例えば自分の住んでいる地域のこととか、国全体のこととか、そういうことを考えて投票に行くだとか、そういう行動をすれば何かしら変わるんだらうと、そういう根拠のない思いみたいなものでこのZ世代という団体を立ち上げました。ちなみに、皆さん、i vote の名前の由来はお気づきですか。これは英語で「I vote」で「私、投票する」です。本当にそれだけ。今、「ああ」と言ってくださった方がいましたけど、何のひねりもなく。結構、この名前を考えるのに仲間の中で3〜4時間話して、結局行き着いたのがこれという何のひねりもない名前だったんです。そんな名前でやっています。

i vote の目標は、すごく単純なんですけど「20代の投票率向上」を目標にやっています。僕らは、投票することを入口だと考えています。何の入口かというと、これは社会とかに関心を持つ1つの入口だと思っています。投票するから、足を運んで投票所に行ってみるから、そこで色々に関心を持って、そこから社会とか自分の地域とか

への関心が高まると思っています。何となく「投票というのはこうあるべき」というのが皆さんの中にもあると思うし、僕の中にもあって、例えば各党の政策とか候補者の政策も含めて、今の自分の住んでいる地域、国の状況や、その中で自分がどういう状況にいるか、その他いろんなことを踏まえて判断して自分の判断が出来上がる。その判断をもとに「よし、この人に入れよう」「この政党に入れよう」というのが投票だというのが納得いただける部分もあるかなと思います。ただ、これってすごく難しくないですか。僕は、はつきり言って難しいと思います。例えば、20歳になったときに、「あなた、今日は選挙があるよ、投票に行きなさい」と急に言われても、待て、待てと。どうやって入れればいいんだ、どう判断すればいいんだ。誰がどう違って、誰に入れば私にとって、この地域にとつていいの？というのがなかなか難しい。色々きちんと調べて判断して投票するという流れが理想だと僕も思うし、これが間違っているとは全然思わないんですけど、これじゃないと投票に行つてはいけないといふとなかなか厳しいんじゃないかなと思っています。

なので、僕らは逆です。選挙というものがある。何となくよくわからないけど選挙

って大事なんだろう、政治って大事なんだろう。そこに自分も関わっているのなら投票に行かなければいけないな。よし、行こう、投票に。投票に行ってしまうと大体思うんです、投票した候補者は落ちたかな、受かったかなって。まず大体思う。さらに、仮に自分の入れた候補者が数年後に汚職とかで捕まっていたりすると、何か悔しい。自分の入れた政党が何か予想どおりではなかった。それが悔しいという思いが絶対にゼロではなくて、次の選挙までの間に、政治への思いとか、地域への思いというのが絶対にちよつとは高まるはずです。その興味、関心がその投票のときより高まって、また次の選挙がある。この前の選挙では余りにも考えなさ過ぎた。この党、この人に入れたけど実は違ったんだ、という経験が増えていって、どんどん選挙の度に投票への関心、政治への関心、地域への関心というのが高まっていくものだと思います。究極的には色んなことを踏まえて「よし、これが俺の判断だ」「これで責任を持って行ける」というところに行き着くんだなと思っています。なので僕らは、投票は社会とかに関心を持つ1つの入口だと思っています。投票するから、足を運んで投票所に行ってみるから、そこで色々関心を持って、そこから社会とか自分の地域とかへの関

心が高まると思つています。ということ、実は僕らは結構過激なことを言っています。「本当に何も考えずに選挙に行つてしまつていいよ、1回目は。」と。あくまで「1回目は」です。20歳になつて選挙があつた、わからないけど、とりあえず行つてしまえ。行つてしまえば絶対にそこで思うことがあつて、また次の選挙の間にいろいろ考える。本当に何も考えずに行く人というのはないので、行くと決めてしまえばちょっとは気になる。各党の政策をちよつとホームページで見たり、例えばこういう団体をやっている俺みたいな人間に各党の政策はどう違うのかという話を聞いたとか、新聞、マスコミなどでちよつと情報を入れて投票に行くことになるので、とりあえず選挙に足を運ぶというのがすごく大事なことだと思つています。

投票率向上には色々なアプローチがあると思うんです。さっき言つた投票の理想像があつて、すごい政策とかを勉強した上で投票に行けという人もいます。そういう団体もいっぱいあります。ただ、そういう団体はいっぱいあつたんですけど、逆によくわからないけどとりあえず投票に行こうよという、ある意味ちよつと不真面目な団体が少なかったので iVote を立ち上げてやってみました。

続いて活動内容の紹介をします。「Ivote メールプロジェクト」というのをやってみました。この先も恐らくやると思うんですけど、去年の参議院選挙、一昨年の衆議院選挙の時にやりました。どういうものかというのと、今日ここに同じぐらいの世代の大学生の方も何人か来ていらっしゃいますが、例えば今まで投票とか政治とかに興味を持っていなかったとして、それが今日、例えば僕の話聞いたから投票とか政治に興味を持ったとか、僕の話じゃなくても大学のゼミとか先生にそういう話を聞いた。やっぱり次の選挙では投票にいかなきやなと思う。ただ、すぐに選挙があれば間違いない投票に行きますが、それが半年後、1年後まで選挙がなかったとすると、その気持ちというのは薄れる可能性だってあるし、他のことを優先してしまう可能性が結構あると思います。ただ、1回投票に行こうと思ったとき、政治に興味を持たなければいけないなと思った気持ちというのは絶対に大きなものだと思いますし、それをなくしてしまうのはもったいない、ということでのプロジェクトです。今は休止中なんですけど、このプロジェクトが動いているときは、投票に行こうと思ったときに僕らの団体のホ

ームページを見てもらうと、「次の選挙に投票に行きます」というコンテンツがあります。例えば次の衆議院選挙、次の参議院選挙に私は投票に行きますというのを約束してもらって、メールアドレスを書いておいてもらいます。そうすると、実際に選挙があるその朝に僕らがメールアドレスにメールを送り返します。例えば「あなたは○月○日に選挙に行くと、自分で約束されていました」と。「将来の自分に約束されていましたが、今日はその投票日なのでぜひ投票に行ってください」と過去の自分の気持ちをもう1回呼び戻して投票に行ってもらおうというプロジェクトです。言ってしまうえばプロジェクトというほどでも

表 ivoteメールプロジェクト

2009年衆院選

2010年参院選

投票理由	件数	投票理由	件数
日本のために	373	日本のために	184
未来のために	217	未来のために	125
自分のために	215	自分のために	104
理由はない	105	次の世代のために	66
次の世代のために	86	理由はない	31
大切な人のために	45	大切な人のために	28
合計	1181	合計	538

ないんですけど、そんな感じで「Vote おせっかいメールプロジェクト」をずっとやっていました。これは1つのデータなんですけど、どれぐらいの人が登録してくれたかとか、という理由から選挙に行こうかなというのを表にしました。左側が2009年の衆議院議員選挙のときで、右側が2010年の参議院選挙のときです。左側の衆議院選挙のときを見ると、合計で1181人の人がこのプロジェクトに登録してくれて、右側だと538人の人が登録してくれました。投票理由というのは、どちらも日本のためにというのが多くてそんなに大差はないんですけど、合計を見てもらえばわかると思うんですけど、ガッツリ登録数が減ったんです、衆議院選挙のときと参議院選挙のときで。これは、自分らの団体が広報を怠ったとかいうわけではなく、広報は恐らく衆議院選挙の時と同じかそれ以上にやっている。団体の知名度であるとか、メンバーの数というのが増えたので恐らく広報というのはいっぱいできたはずなんですけど、やっぱり登録者数が減ったというのは多分全体的な選挙の盛り上がりと単純に比例している部分がかなり大きいなと思っています。そう考えると、このプロジェクトは意味があったのか？みたいな。これがなくても、投票というのはそのときの選挙の盛り

上がりによって左右されてしまうのかなと思って、それはちょっとどうなんだというのはivoteメンバーで話にもなりました。ただ、もしかしたらちよつといじれば何かしら変わるところがあるかもしれないし、これ自体は、例えばもつと地方別の選挙に分けてやる等、色んなやり方があると思うので、多分また形を変えてやると思います。とにかく、メールを使って何かをやるという意味では僕らは結構楽しんだし、それにインパクトもあったのかなと思っています。ちなみに、さっきivoteが考える投票に行かない理由をお話ししましたが、その中でいうとこれは『面倒くさい』という理由に一番特化しているのかなと。いざ行こうと思っただけど、当日になると面倒くさいなと思ってしまった人に、その面倒くさをなくさせるための狙いでやっていました。

次は、僕が大好きなイベントです。「居酒屋ivote」というイベントを全部で9回やっています。今度、10回目もやります。何をやるかというと、普通の学生とかが行くような居酒屋、例えば3000円で3時間、コース7品に飲み放題つきという安い居酒屋があるんですけど、そういうところに本当に学生、若手社会人の方も含めて40（

50人ぐらい集めて、国会議員の方にできれば全政党各1人ずつ来ていただく。集まって何をするのかというと、本当に飲み会をするだけです。例えば、主要政党6党の人が来てくれるとなったら、テーブルを6個に分けて参加者を6等分して、各テーブルに議員さん1人ずつ入ってもらいます。それで、時間を区切って、例えば30分ごとに議員さんが全テーブルを回って、そのイベントの間に各党の議員さんとかかなり近い距離で、しかもざつくばらんな飲み会という何でも言えてしまう場で話すというイベントです。

目的は色々あるんですけど、大きくは2つあるのかなと思っています。『政治とかがわからないんだ』というのと、『政治との接点がない』ということに対して何かアプローチできればと思います。例えば、イメージしてください。学校の先生といったら、多分恐らくはほぼ全員の人が1人の人間がぱっと思いつかぶんです。1人ないしは2、3人とか。お医者さんといっても何となく思い浮かぶ。あんなしゃべり方をする人でと。じゃあ国会議員は？と言われたときに、多分「ん？」となる人が多いと思います。自分もnoteの活動をやる前までは、国会議員さんと言われても1人も思い

浮かべることはできなかったです。その議員さんがどんな顔で、どんなしゃべり方をしているのかとか、そういうことが思い浮かばないようだと、やっぱり距離感というのは遠い。今日みたいな講演というちょっと離れた場じゃなく近い距離で話をすることで、政治全体というほわんとしたものではなくて政治家という1人の人が見えてきて、その中だとやっぱり興味、関心を持つ可能性が高まるんじゃないかなと。

あと、やっぱり国会議員の人と直接話をする、直接触れ合うということは大きな意味を持つと思っています。ただ、国会議員さんと呼んで勉強会をしますというイベントは東京とかだとよくあることではあるんですけど、そこに来る学生なり若い人はどういう人かというところ、それは政治が好きで、その国会議員さんといろいろ議論したくて、そういう政治が好きになってしまっている人なので恐らく投票に行っているんです。僕たちは、そ

写真1



ういう人ではなくて、恐らく投票にも行っていないし、政治なんて知らないよみたいな人たちを何とか接点を持たせたいなと思って、飲み会ならちよつとでもハードルが下がるんじゃないかなと思って飲み会をやっています。大体こんな感じでいつもやっています（写真1）。例えば、手前から2列目の左から2番目のところに1人の議員さんがいて、その列を右にたどっていくと一番右端にもこの議員さんがいる。これぐらいの距離感。あとの人たちは参加者で、また奥のグループにも同じようなテーブルが何個かできている。こんな密着感でやっています。結構参加者の人はある種のパニックみたいな状況で帰っていく人も多いです。つまり、3時間の間で5〜6政党の議員さんと話してしまうので、例えば政権交代の後に今の民主党はどうなんだという空気が世の中に漂い始めた時だと、まず自民党の議員さんが来たときに「民主党はダメだ、俺たちにもう1回やらせてもらわなきゃだめなんだ」みたいな話を当然するわけです。そうしたら、政治とかを余り知らない参加している人は、やっぱり民主党はダメなんだと思うわけです。でも、その次に民主党の議員さんが来たときに「今はちよつとダメだけど、自民党のときよりは全然よくなるし、この先任せてくれ」と言わ

れると、やっぱりそうなのかなと思うわけです。どっちなんだろうと思ったりしてると、またここで常に野党の方が来て「いや、どこもダメだ」という話をするともうパニック状態。そんな状況が毎回の「居酒屋ivote」で起こったりしています。その参加者の人達が本当に政治をわかって帰るのかはわかりませんが、政治をわかるきっかけというのがそこで結構できていると思います。ちなみに、このイベントは議員さんを最大で6人も呼びびします。呼ぶのにどれぐらいお金がかかっているんだと思われる方もいるかもしれませんが、全然お金は払っておりません。むしろ、お金を払っていただいております。参加者も、ivoteメンバーも、国会議員の人もあわせて飲み会をやるぞという趣旨のイベントだし、本当に飲み会をやるということでOKをいただいているので、みんな3000円。スタッフも、参加者の人にも、国会議員さんにも3000円払ってもらってという、そんなイベントをやっています。このイベントはすごく面白いです。東京だから国会議員さんが比較的叫びやすいというのはありますけど、例えば新潟県でやろうと思われたときに県議会の議員さんなら呼べるとか、市議会の議員さんなら呼べるということであれば、そういう方を呼んで開催してしま

えば全国どこでもできてしまうイベントなので、これはどんどん広げていきたいと思っています。例えば、大阪だとたこ焼きをつくりながらやったらしいんです。僕らの東京での「居酒屋note」にも出てくださった大阪の議員さんで、大阪の他の団体がやった同じようなイベントに出た方がいるんですけど「たこ焼きを焼きながらどうまくしゃべれない」と言っていましたので、たこ焼きはやめたほうがいいと思います。

次に、「今日のめいすいくん」というイベントをやっていました。「めいすいくん」というのは、国の明推協のキャラクターで、これがかわいいんです。そのかわいさを使って、街に出ていって、道行く若者に声をかけて今

の政治とか選挙についてどう思っているかとか、疑問なんかをフリップに書いてもらって、それをnoteのホームページで日替わりで掲載していくというのをやっています。こんな感じで、子供とかいっぱい集まってくるので、いろいろと人を集めるにはもってこいです。（写真2）ただ、ちょっと難点があるのが、某ア

写真2



ニメのキャラクターにすごく似ているのでよく間違えていろんな人が集まってくるので、その辺は御了承くださいというところです。

次は「20代の夏政り」、なつまつりと読んでください。

まつりごとの「政」と、普通のお祭りの「祭」をかけています。何をやっているかというところ、こんな感じでした。（写真3）去年、一昨年と夏に大きな国政選挙がありました。

その大きな選挙というのは間違いなくその夏、日本最大のイベントじゃないですか。そのイベントに、もっと若い人に参加してほしいなど。もっと若い人が参加するということとは、つまり投票に行こうということと呼びかける何か面白いやり方はできないかなと思って考えたイベントです。せっかく夏なので祭りっぽくしようということ

で、こんな感じで浴衣やら甚平を着て街頭に出て、若い人から若い人に投票に行こうよと声をかけるイベントをやっていました。福島、千葉、大阪、横浜、名古屋、そし

写真3





写真4

て東京でやりました。東京だとこんな感じのパレードに進化しました(写真4)。パレードといってもこれは完全にデモなんですけど、100人ぐらい集めて固くない感じのデモをやった。この時すごくびっくりしたのが、その辺で見ていた小学生が10人ぐらい飛び入りで参加してきて、なぜか小学生と一緒に「投票に行こう」と呼びかけました。去年の参院選の前には全国18カ所でやりました。一昨年の衆議院選挙の前は11カ所でやりました。もちろん、自分たちの団体は東京にあるので、東京以外のところはできません。なので色んな全国の大学生やNPOみたいなところに声をかけて、一緒にやろうということでやったイベントです。大体、去年だと全国で300人ぐらいがこのビラを配る側、パレードする側になりました。このイベントのねらいは『接点、実感が無い』というところをなくすためのイベントです。ビラ配りって、ビラを渡した相手が選挙に行くだろうというのをもちろ

ん狙つてのイベントなんですけど、恐らくビラを1万枚配つてもその中で100人、もしくは200人ぐらいの投票に行かないと思つていた人が行くようになる可能性はあつても、それはすごい労力の割に少ない。実は、僕らはこのイベントをもう2つのねらいを持つてやっています。1つは、例えば学生団体がこんなパレードをやつているとちよつと面白そうじゃないですか。なので、マスコミの方が毎回取材に来てくれました。映像とかも出してきて、若い人が選挙に行かなければと声を上げていますと取り上げてくれます。パレードをやるだけだと、そこにいる人しか見ないんですけど、マスコミに取り上げてもらうとそれ以外の色んな人たち、全国で見ってくれる人たちがいる。その見てくれた人たちの中で、若い同世代の人たちの中でちよつとでも投票に行こうと思う人が増える可能性がある。そういうことを考えて、ちよつと目立つようなイベントにしてみました。

実は3つ目が最大の目的なんですけど、配った人。例えば、自分たちみたいなライブという活動をずつとやつていればもちろん投票に行くとか、選挙のことを考えるというのがある種の当たり前のことになっているんですけど、今回集まってくれた

全国の300人という人の中で常にそういうことを考える人って実はほとんどいない。liveから無理矢理頼まれたとか、友人に頼まれたからとかでこのイベントをやってくれています。ただ、やってしまうと、1日12時間ぐらい選挙に行きましようと言いながらビラを配ってしまうわけです。例えば、街角でビラを配った人に色々話しかけられたり、自分で参加した中で、その後の懇親会とかで政治って何だろうと考えたり、そういうきっかけになるので、そういう意味でこのイベントに参加した側というのがかなり変わる。参加するハードルはそんなに高くないけど、結構政治のこととか投票のことを考えてしまうイベントになるのかなと思っています。これも結構面白いので、ぜひやってください。例えば、渋谷のスクランブル交差点といって、よく天気予報とかで出てくる大きい交差点、あそこを回るコースにすると、僕らが通っている間は他の全部、車も歩道も含めて信号が赤になるんです。自分達のところだけ青で通してくれる。本当に人がすごく多くて、1回の赤の間に数千人ぐらいが横断するらしいので、1000人とか2000人が「何だあいつら？」とずっと見ているところで他人に叫べるというのは結構面白い経験になりますので、ぜひぜひ。

次は、コラボ企画というのを紹介させていただきます。コラボ企画は何個かやっている
ので、その中で1つ大きいのを紹介します。例えば、何か若い人に向かって政治のこ
とを考えると、選挙のことを考える企画をしようと思っても、仮にいくらい企画
だとしても、実際にそこに人が来てくれないければ意味がないし、来る人がもともと俺
は政治大好きだぜという人では、企画の意味をなしていない。そこに、政治とか選挙
とかは余り知らないし、どうでもいいやという人が来て、終わったら、俺、投票に行
こうとなるのが一番理想の姿です。これは、Voteだけではなかなか厳しいというこ
とで、いろんなゲストの方とか、色んなところとコラボレーションで何個かやってい
ます。そのうちの1つが、東京大学の学園祭で去年やったイベントなんですが、大勢
の人を集めてイベントをやりました。ロンドンブーツ1号2号の田村淳さんという有
名な芸人の方をお呼びしてイベントをやりました。中身では結構まじめな政治の話と
かをやるんですけど、告知方法がちよっとセコくて、学園祭なので大学の中にいつ
いビラを貼るんですけど、その中に「ロンドンブーツ・田村淳、東大に来る」と書い
て、隅っこのほうに小さく「政治について語る」と書いて貼るんです。そうすると、

よくわからないけど田村淳というすごく有名な人が来るから見に行こうという層がドサッと来ました。よくわからないまま、何をするんだろうみたいな感じで。でも、いざ始まってしまうと実は結構真面目な方なので、1時間半ぐらい真面目な話を僕らとか、東大の教授とかと一緒に繰り広げていく。何人かの方は、もちろんこんな話じゃなくて面白い話を聞きたかったのに、みたいな感じで帰ってしまいう方もいらっしたんですけど、大体の人は何これ？と思いながらも、話しに耳を傾けて政治とか投票ということを感じ取り聞く1時間半になった。じっくり1時間半聞いてしまうと、やっぱり選挙に行かないといけないのかなという状況になってしまふので、いい感じで誰かタレントなり、他の有名人の方なりを使って人を集めて何か真面目なイベントをやって、人の気持ちを变えて終わらせる。こういうのはすごく面白かったかなと思います。例えばスポーツ選手の方でもいいですし、そのほか色々な有名な方がもっとこんな活動に参加して協力してくださるといいんですけど、なかなか今のところは成功していない状況があります。田村淳さんは、結局3回一緒にイベントをやってくださったんです。いろんな方に当たっているんですけどなかなか他の方とか、スポーツ選

手の方は今のところOKが出ていないですが、引き続きやっています。

コラボ企画がもう1個。今のように、ゲストとか一緒にやる団体によって人を集める方法と、若い人がもともと興味のあるもので誘っておいて、そこから派生させて政治のこととか、選挙のことを考えるようにして気持ちを変えていくという方法がもう一つあると思います。やはり今の大学生とか若い世代だと、就職できるのかなとか、正社員になれるのかなというのが1つの大きな悩みだと思います。さもそんな感じの就職どうなのとか、これからの働き方はどうなのみたいなイベントをすると結構人が集まります。その中で、もちろん就職難の話とかもしますし、それにプラスして例えば政治の中の枠組みでこういう法律があって、ここを変えようとしているとか、ここが議論されているけどそれって本当に僕らの就職活動に役立つかとか、それはもっとやってくれたほうが役立つねとかそんな話につなげていくと、もっとそのことに対して投票に行くとか何か変わるんじゃないのかということを狙ってやりました。あとは「環境×政治」とか、「医療×政治」とか、そんなのをやっています。

最後に「妄想電話×ivote」という企画を紹介します。これは今年の統一地方選挙

のときにやりました。iPhoneとかスマートフォンというのが最近はやっていると思うんですけど、あれはアプリという色々な機能がついています。その中ですごく有名な「妄想電話」というアプリがあります。どんなものかというと、そのアプリを立ち上げると、例えば自分みたいな男性だと、さもかわいい女性から電話がかかってきたみたいな電話がかかってくるんです。本当はかかっていなくて、携帯の中で勝手に行われているだけなんですけど、携帯の中で男がグツとくるようなセリフを言ってくれる電話がかかってくる。そういうアプリというのがすごくはやっていて、その選挙版というのを「妄想電話」をつくっている会社の人たちと一緒に「選挙に行くあなた、格好いい」って言うてもらった。そんな企画をやりました。

自分が3年間活動を行ってきたことを話します。3年間活動をやってきて、今紹介した活動内容というのは、どちらかというとうまくいったかなと思っている企画で、実際にそっちの方が多いです。ただ、やってきた企画の中で失敗したと思う企画もいっぱいあるし、企画書の段階で結局成功せず、企画にならずに終わってしまった、色々アプローチしたけどダメだった企画というのもしっぱいあります。企画を

立てる時点で成功するだとか失敗するだとかは余り考えたことがなくて、とりあえずやってみようと。例えば、どこかの歌手と一緒にイベントしたいなら、とりあえずレコード会社に電話をかけまくってみたいいいじゃないかと。結局全部ダメで終わったりしているんですけど、そんなのを日々やっています。ただ、その失敗の中からいろいろ模索していつて次のイベントが出たりすることもありますし、何か新しい成功につながることもあるので、どんどんとりあえず動きまわることが必要だったのかなと思います。もちろん、Zineの活動をやってきて効果が上がったなと思うこともあります。例えば、選挙の日に自分宛にメールとかで「お前がこういう活動をやっているから、俺は投票に行ったよ」みたいに友達からメールとかが来ると、それはうれしくてしょうがないです。そういう効果を感じることもありますけど、ただ果たしてZineが3年間活動やってきて若い人の投票率が低いとか、政治への関心がないという根本的な問題が解決されたのかなというのは、まだまだ全然わからない。ただ、効果は本当にゼロではないので、続けていくことに意味があるのかなと思っています。

若者の投票率向上のために、Zineがどういう方法、どういう考え方で今まで活動

をやってきたのかをお話しします。1つは、やっぱり漫然とイベントをやるとかではなく、このイベントでこういう層をこうしたいんだとか、こういう人たちを集めてこういうことをしたいという目的をすごく意識しています。例えば「居酒屋live」は、政治に興味のない人、投票に余り行かないぞという人に40人集まってほしいんです。そこに、仮に80人の申し込みがあつたとしても、それが「俺は政治に詳しいぞ」という人が80人申し込みに来たら、そのイベントは失敗なんです。そのあたりは単純な数とかではなく、実際に何ができたかというのはやっぱりしっかり考えなければいけないなと思っています。

また、さっきのコラボ企画にも大きく関わるんですけど、やっぱり自分たちだけで出来ることというのはすごく少ないですし、力であるとか、知名度などもないので、いかに色んなところを巻き込んで一緒にやっていくかというのが今後鍵になってくると思います。

活動していく中で、他の同世代とのギャップというのをすごく感じることはありません。自分たちはこの目的でこのイベントをやったから、そうなるはずなのにならない

ぞということがすごくあります。やっぱり同世代の人にどんどん聞いていかなければいけないと思います。接触率というか、いかに日々同世代の人に話しかけに行って、「お前は投票に行っているのか」とか「政治とか、こんな感じで大事だからちよつと投票のことを考えよう」という話を、真面目に言うのと嫌われる話しを、いかに嫌われないように、でもしつこく色んな場で言うかというのをすごく大事にしています。

ivote の中では、例えばいろんなイベントをやることも大事なんですけど、いろんなイベントをやるよりも日々学生の集まり——普通の遊びのような集まりでもいいし、ちよつと真面目な環境問題について考えるような集まりでもいいし、そういうところに行きまくってなぜか政治の話を参加者にしまくるというのがすごく大事なのかなと思います。

常時啓発ということで考えると、「選挙のときに投票に行こう」だけだと「何で？」というのがよくわからない。何で投票に行かなければいけないのか。それは、なんか啓発活動をやっている人から投票に行ってくださいと言われたから行く、というのではなくて、常に政治というのは行われていて、その政治に興味、関心を持っているか

ら投票に行く、という風にするのが常時啓発の一番大きな意義だと思います。このあたりが臨時啓発とはまた違った意義があるのかなと思っています。

臨時啓発という視点で考えると、選挙の時に一番足りていないのはやっぱり情報かなと思います。選挙に行ってくださいと。じゃあ、どの候補者が何の政策を言っている、それが自分にどう関わってくるんですかとか、この候補者とその候補者の違いは何ですかみたいな情報が本当に少ないと思っています。そんなに情報が少ないのに、選挙に行きなさいと言われても行けないという人も多いのかなと思っています。なのでivoteも選挙のときに政策比較をやったりとか、候補者を集めて討論会をやったりとか、色んな手段をやるうとはしてきました。しかし恐らく一番成功しなかったところだと思っています。こういった情報をいかに出すかというところは、今後すごく大事になってくるのかなと思います。

あと、教育がすごく大事だと思います。刷り込みというのは、例えばすごい真面目な政治学者の話でもいいし、そういう人たちの話を1時間聞いて「よし、選挙に行こう」と思う人が多いか、小学校とか幼稚園の頃から10年間ぐらい親とか周りの人に

「20歳になったら選挙に行くんだよ」と言われ続けた人のほうが行くのかというと、多分後者のほうだと思っています。理論的にこうだから選挙に行きなさいというよりも、選挙は行くもんなんだという話をいかに20歳になるまでに伝えられるかというのが1つの鍵になると思います。

もちろん教育というのは色々あって、例えば学校の中での模擬選挙や、市民教育で地域に関わるために選挙に行くという教育するのもいいです。家庭の中でちよつと選挙の話をしてみるとか、選挙の時にお父さんから息子に「お前、選挙に行けよ」という話があるだけでも、これはかなり大きな変わりがあるんじゃないかなと思います。

今、iVoteの色んな話をしてみましたけれども、iVoteの一番の強みは「学生である」ということだと僕は思っています。学生であるから、恐らく社会人の方に比べると時間がありますし、iVoteでやっていく上で何かお金を稼がなければいけないとか、費用対効果みたいな話はないので、本当に軽いノリというか勢いでやってきた部分があるのです、そこが1つの強みかなと。あと、学生というくくりがあると、全国と同じ

世代の学生に比較的つながりやすく、色んなことがしやすいということもあります。また、これはかなり大きいと思うんですけど、社会人の方がいろいろと構ってくれるとか、「頑張れ学生」みたいな感じで色々やってくれるというのもあります。これらをうまく具合に使いながらやってきたのが自分達の強みかなと思います。今日来て下さった皆さんが、今後啓発活動をやられる上でVoteの真似をする必要は全然なくて、自分たちの強みが何で、それをどう生かすのかというのが一番考えるべきところかなと思っています。

そろそろ終わりますが最後に1つ、面白いデータを。2010年の参議院議員選挙の投票率は、全世代で59・9%でした。これが低いとか高いということもあると思うんですけど、同じ選挙で20代前半の投票率が33・68%でした。何だやっぱり少ない、20代は投票に行かないと思う人が大多数だと思うんですけど、そのひとつ前の2007年の参議院選挙と見比べると面白いんです。全体の投票率は下がっているんですが、20代前半の投票率だけなぜか上がっている。これは国政レベルでいうと恐らく初

めてのことだと思います。もしかしたら若い人がどんどん政治に興味を持ち始めた時期かもしれません。ひょっとしたら自分たちの生活とか将来の危機感が増えたからというネガティブな理由からかもしれないんですけど、とにかく色んな意味で若い人がちやうど今変わろうとしてきているときなのかなと思います。なので、今、何かをやるというのはすごく大きな意味があるとは思っています。ただ、実はさっきも言いましたけど僕は引退してしまったので、I'veとて次の代が色々動いてくれると思います。僕もまた個人で、もしくは他のことで何かできればどんどんやっていこうとは思っています。

自分の話はここで終わろうと思います。どうもありがとうございます。（拍手）

私たちにとって政治とは どのような意味があるのだろうか？

鹿児島大学法文学部教授 平井 一臣

平成23年10月1日 於 鹿児島県鹿児島市

皆さん、こんにちば。鹿児島大学の平井と申します。今日は、若者が政治とか選挙を考えるとという集まりをやっているということで、いいことだなと思います。僕は鹿児島大学で政治学を教えているんですが、「学生投票率100%をめざす会」にも鹿児島大学の学生さんが結構いるということで、大学の中でお会いしたことがあるかもしれないんですが、鹿児島大学以外の県内のいろんな大学の学生さんが主体的に活動しているというのは、非常に政治学を教えている立場の人間にとっては心強いといえますか、まだまだ日本も捨てたもんじゃない、いいなという思いがします。

今日は、「私たちにとって政治とはどのような意味があるのだろうか？」ということで、選挙も含めて政治というものが私たちにとって一体どんな意味があるのか考えてみたいと思います。選挙に行かなくても罰則を受けるわけではありませんし、特にとがめられるわけではないわけですが、なぜ選挙にやはり行ったほうがいいのか、行くべきなのか。あるいは、選挙以外のいろんな方法で政治にかかわるといことが、どういう意味を持つのか。政治にかかわるよりは映画を見に行ったり、デートをしたり、そっちのほうが楽しいという考えもあるんですけど、もちろん日常生活のいろんなことをやりながらどこかで政治にかかわる必要性というのがなぜあるのかということ、1時間という時間ですけれども今からお話したいと思います。

最初に、この十数年に若者の政治離れということが指摘され続けています。地方選挙の度ごとに、僕のところにも新聞社の人がいろんなインタビュアーに来るんですが、必ず、そのときに聞かれる論点の1つが若者の政治離れということなんです。

ただ、これは日本だけの現象ではなくて、いわゆる欧米の先進社会と言われる国では、いずれも若者の政治離れというものが進んでいるという傾向があります。もちろん

ん程度の差はありますけれども、欧米諸国でも似たような傾向がある。それは一体なぜなのかというと、1つにはある程度経済的に発展してそれなりの豊かさというものを達成したということがあります。そして、社会が安定している。そうすると、もちろん本当は社会の中にはいろんな問題があるわけですが、若者たちがそういう社会のことを考えたり、あるいは積極的に行動したり、そういう機会というものが比較的少なくなる。その中で政治離れが起こっている。したがって、日本だけの現象ではないわけなんです。

しかしながら、若者の政治離れというのはやはり憂うべきことであるという指摘がなされているわけなんです。というのは、やはり若者というのは10年後には大人になり、30年後にはお年寄りになっていくわけですから、若い時期に政治的訓練を受けていないということを意味するわけです。そのまま30代、40代になっていったとするならば、結局極めて政治意識が低い層が大量に生み出されていくことになるわけです。そういう意味で、単に今、若者が選挙に行かないというだけではなくて、中期的、長期的に見て若者の低投票率、若者の政治離れがずっと進むと、中長期的にその国の

政治意識なり政治的なレベル、こういったものが低くなっていくのではないか、こういう指摘がなされています。日本を含めて先進社会では、若者と政治、これをどう再び切り結んでいくのかというのが1つの大きな政治的な課題になっています。

しかし、僕のような政治学者が新聞でコメントしようが、マスコミでいろんな報道がなされようが、なかなか若者は政治に向き合おうとしないという状況が進んでいます。でも、今、1つの大きなチャンスだと思っています。3月11日に東日本大震災、そして、福島第一原発事故というのが起こりました。この3月11日の出来事というのは、単にもの凄い規模の災害があったとか、これまで当然視されていた原発の問題を見直すきっかけになったとか、いろんな意味があるんですが、政治、あるいは政治への参加という観点からしても重要な意味を持つ出来事だと僕は思います。

それはどういうことかという、東日本大震災はやっぱり政治というものがいかに我々にとって不可欠なのか。それから、政治というものがもし一瞬でもなくなった場合、これは大変なことになるといことが、この3月11日の被災でわかったことの1つなんです。参考になる新聞記事を3つほど紹介します。「震災から何を学ぶのか」

ということについての私のインタビュー記事。それから、朝日新聞の「集団移転先で「情報格差」という記事。それから、南日本新聞の、色んな自治体がどういう応援に行っているのかという記事なんです。色んな自治体に関する新聞記事やニュースが出ていたんですが、簡単に言うと一番印象的なのは大槌町というところでした。そこは、役場がすべて流されて、町長さん、それから役場の職員のかんりの部分が津波に押し流されて行方不明になって亡くなったわけです。つまり、町の政治の中枢というのがなくなったわけです。その結果どういことが起きたかというと、震災の後、大槌町はほかの町村に比べて状況の把握すらできない。そして、どういう対応をとつていいのかも判断が下せない。こういう状況がしばらく続くんです。

それから、もう1つ政治というものがいかに重要なのかというのは、双葉町という原発がある町は埼玉県に役場ごと引越しました。これもニュースに出たから、皆さん、記憶にあると思います。なぜ役場が引越さないといけないのか。小学生、中学生、高校生は被災地から避難して、避難先に転校するわけです。学校ごと移転するということではなくて、転校するわけです。単純に考えると双葉町の人たちは避難した

ら、避難した先の役場に、その自治体にそれぞれ「転自治体」すればいいじゃないか、こういう考え方も成り立つわけです。でも、そうじゃなくて役場ごと移っている。そして、自治体の業務をやる。そして、住民サービスを再びやる。こういうことが起きるわけです。つまり、一瞬でも役場がなくなったら社会が動かなくなる。あるいは、もう一度社会を動かそうとすれば役場ごと移転して、この役場がないと人々の生活というものは動いていかない。こういったことが3月11日の事態で明らかになったわけです。

そういう事例を見て、僕は、とりわけ地方自治体の政治というのは、我々にとっての毛細血管みたいなものだと考えるべきであろうと思いました。どういうことかという、要はここにいる皆さんの体の中に血が流れていて、毛細血管にまで血が行き渡っているの、ここについてこうやって僕の話聞いて、僕も話しているわけです。しかし、今この瞬間でも、自分の中に血が流れていて毛細血管にまで云々と考えて生活している人はいないわけです。つまり、普通に動いているから我々は意識しないわけです。ただ、それがとまると大変なことに本当はなる。つまり、とりわけ地方の政治

というのは、普通は我々が毛細血管と意識しなくてもいいように、この血の循環のよう
に回っているところがあるわけです。しかし、それがストップしたり、変な流れ方
をすると、途端に我々の生活に大きな影響を及ぼすことになる。政治というのは、そ
ういう側面があるんじゃないか。このことを、3月11日から学んでいく必要があるし、
新聞の記事なんかでもそういう観点から特集を組んでいる記事が幾つか最近出ていま
す。そういうことを考える大きなきっかけに、この3月11日はなっているんじゃない
かと思うんです。そこから、もう少し政治というものが必要不可欠なもの、そしてか
なり大事なんだという考え方が今後日本で根づいていくのかどうか、広がっていくの
かどうか、そういう非常に重要な時期に今の日本はあるのではないかとということです。
じゃあ、もう少し本題に入ります。政治は必要不可欠だと僕は言いましたが、では、
私たちの生活と政治、これは一体どういう関係にあるのかということを大きく3つに
分けて説明したいと思います。

我々の生活にとつて政治というのは、もちろんいろんな意味があるんですが、とり
わけ3つの意味があると思うんです。1つは、今お話した毛細血管としての政治な

んです。何げなく利用しているさまざまな仕組みやモノ、これは政治の世界で決定した結果できた仕組みであつたり、モノであつたりするわけです。皆さん、今朝起きて、そしてこの会場に来るまでのことを思い起こしてみてください。遠くから来た人はホテルで起きたんでしょうけれども、自宅から来た人はその自宅で起きて顔を洗う。しかし、ホテルに泊まった人も、ホテルで起きて顔を洗つたり、歯を磨いたりするわけです。皆さんが今日使った水は、鹿児島市水道局というところがやっているわけです。そして、朝御飯を食べた後に出かける。家のドアをあけて出たところ、出てすぐはひよっとしたら私道かもしれません、ほとんどがいわゆる公道。県道であつたり、町道であつたり、国道であつたりするわけです。これは、やはり政府が管理したり、維持したりしているわけです。そして、この中にはひよっとしたら市営バスでやってきた人がある、あるいは路面電車で行ってきた人があるかもしれません。市営バスはもちろんですが、路面電車も鹿児島市交通局というところがやっている。つまり、少なくとも皆さんが今日起きてここに来るまでに、水道の水、歩いてきた道路、そして乗ってきた乗り物、これは政府が何らかの形で運営したり、管理したり、維持したりし

ている。そこにどの程度お金をかけるのか、どれくらいどういった形で運営すればいいのか、これを決めているのは政治なんです。我々が何げなく利用しているモノや仕組み、その多くは政治の決定によって運営されたり、維持されたりしているんだ。これが、まず第1の意味です。

第2の意味は、今お話ししたのが非常に日常的な政治で、先進社会ではとりわけ重要な意味を持つものです。しかし、歴史を振り返ると、時には政治というのは人の運命を左右する非常に恐ろしいものでもあります。典型的な例は戦争や革命です。幸い日本は、戦後ずっと戦争ということをやっていませんけれども、一たん戦争が起こると、それは多くの人の命を奪うわけです。アメリカの場合には、9・11の後にアフガンに行ったり、イラクに行ったりして戦争をやっています。その戦争をするかしないかの決定は政治が行うわけです。政治というのは人の運命を大きく左右する、そういうものなんだ。これが、2つ目の意味です。

それから、3つ目の意味は「問題を発見する政治」です。これはどういうことかといえますと、かつてはプライベートな問題だと思われていたことが、政治の力によっ

てプライバシーな問題じゃなくて社会的な問題だというように、「社会の問題」として発見されて、政治的な解決の場を持つて行く。これも大きな役割なんです。例としてドメスティック・バイオレンスとか、セクシヤル・ハラスメントがあります。例えば、大学でもセクハラ事件というのが時々新聞で話題になります。今振り返ると僕が30年前学生をしていたころの、あの当時の大学の先生は結構危ない人がたくさんいたんじゃないのかなという感じがするわけです。つまり、コンパに行つて大学の先生が、女子学生に「ちよつと隣に來い」なんてことを言う先生もいたわけです。当時は、非常にまだ男尊女卑といいますか、大学生に女性が少なかったということもあつたんでしょうけれども、そういったことがあつてもこれはセクハラだというような意識というものは余りなかったわけです。ところが、やはり20年ぐらい前から、それは社会的な問題である。そして、政治的に解決しなければいけない。こういう声が強くなった。そして、法律なんかもできて今のようになつたんです。ドメスティック・バイオレンスなんかも、昔は家庭内の問題だから、それは家庭内で処理すべきであるという考え方だったわけですけども、社会的な問題として取り上げるようになった。これ

が、3つ目の我々の生活にとっての政治の役割ということになります。

今言いましたように政治というのは、いろんな意味で重要なんです。ところが、今の世の中の選挙権というのは、20歳になったらみんな選挙権というものを持つわけですが、すけれども、だれしもが政治に関与する、政治に参加するということができるようになったのは、せいぜい60〜70年前のことであって、それ以前は一部の人しか政治に関与できなかったわけなんです。その問題を考えてみたいと思います。

今の政治の原型というのは近代、フランス革命とか、アメリカの独立戦争、18世紀の後半の市民革命と言われる時代につくられたと言われています。議会制民主主義であるとか、あるいは今の選挙制度、これも基本はフランス革命であるとか、アメリカの独立革命であるとか、あるいはもうちょっとさかのぼりますがイギリスの市民革命、こういった時代にできたわけです。我々にとって非常に重要なのは、最初の市民革命のときに、なぜ市民の人たちは革命まで起こして、そういう議会制民主主義の制度をつくったのかということです。その1つの理由は実は税金なんです。誰から、ど

のように税金を取ろうかというのが、革命が起こる大きなきっかけになった。簡単に言うと、当時は産業革命というのが起きて、いわゆるブルジョアジー、企業家という人たちがどんどん力をつけていったわけです。彼らはお金を儲けますから税金を払うところ、近代以前は、そういうブルジョアジーの人たちが税金は取られるけれども発言権はない、政治に対して影響力を振るえない。これはおかしいじゃないかとなります。税金を払った人間は、ちゃんと政治に発言権を持つようにすべきである。これが、近代の市民革命の原動力の1つになったんです。これは、今でも同じなわけです。この構図というのは、我々が税金をいろんな形で納めている。その税金を使って仕事をするというのが政治の世界の1つの特徴なんです、我々が納めた税金をどのように使うか、どこに使うのか。これを政治の世界で決めるのであるならば、税金を納める我々がその税金の使い方を決める政治家たちを決めるべきであると。こういう性格が選挙にはあるわけです。これは、近代の市民革命の延長線上にあるとも言えるわけなんです。

ただし、近代の市民革命というのは限界があつて、そこで選挙権を得た人たちとい

うのは、基本的には財産がある人、お金がある人です。ブルジョアジーといいますが、財産がある。それから、もう1つは男性。女性は排除されている。すなわち、非常に限られた人々だけが参政権を持つことになったけれども、それ以外の一般の労働者であるとか、今風にいうとサラリーマンとか、こういった人々は参政権からは排除されていきました。しかし、それはおかしい、何で財産がある人間だけが選挙権があるのか。当然こういう声が出てきまして、普通選挙運動というのが行われるようになる。これは、デモクラシーの先進地であるイギリスやフランス、こういったところで早くから始まりますが、日本も基本的には同じコースをたどるわけです。日本の場合には、1868年に明治維新が起きて、この薩摩が1つの大きな担い手になるわけですけれども、明治政府ができて、そして帝国議会というものが開かれる。そのための選挙が行われるわけです。でも、このときに選挙権を持っていた人たちは非常に限られた人たちです。納税額で制限が設けられていまして、いわゆる大地主と言われる人々しか選挙権がなかった。こういうところから日本も出発しています。これは、中学校ぐらいの歴史でも習うと思うんですけども、普通選挙運動というのが起きて、ようやく1

925年に普通選挙法というのができます。ただし、これは男だけです。結局、女性の参政権は、1945年に日本が戦争に負けて占領が始まって、いわゆる占領改革の中でようやく女性の参政権というものも認められるようになりました。

僕はもともと専門が日本政治史というのが専門なので、この辺のところは非常に気になるところなんです。ちょっとだけ言っておきますと、日本では普通選挙をやるべきだと戦前に一生懸命主張した政治学者として、吉野作造という人がいます。名前は聞いたことがありますよね。東京帝国大学の吉野作造。この人が一生懸命主張するんです。当時、選挙権をめぐる色んな論戦というのがありました。吉野作造が一生懸命色んな論文を書き、みんなに選挙権を認めるべきだと書くんですけど、やはり批判を受けるわけです。その中で吉野が非常に苦慮した批判というのは何かというと、みんなに選挙権を与えるなんていうのは甘すぎる。つまり、選挙をやるには、投票するにはそれなりに政治に対する関心、知識、こういうのがないとんでもないことになるんだ。何と。何も政治のことを考えずに選挙権だけを与えたら、一体どうなるんだ。こういう批判を吉野は受けるんです。吉野が、それに対してどう答えているかといいま

すと、そうかもしれない。政治のことを何も知らずに、関心もなく選挙権だけ与えられたら、お金による買収にどんどん乗っていくとか、表面的に言葉巧みな政治家に引っ張られていくとか、そういうことは十分あり得る。吉野は、それは認めます。しかし、吉野はこういうふうに書いているんです。しかし、そういう政治的トレーニングというのは、選挙権を実際に行使する中でしかできないんだと。最初から選挙の世界から排除しておいて、政治について学べとか、政治のことを考えろと言ったって、権利のない人間はそういうことをやはりなかなか考えない。だから、そういう危険性はあるかもしれないけれども、選挙権をみんなが持つて、そして選挙ということを経験しながら学んでいくしかないんだ、トレーニングしていくしかないんだ。つまり、政治教育の重要性ということを吉野は言います。

残念ながら日本の場合、政治教育というのが今日まで十分になされてきたかという
と、なされていなかった。つまり、選挙の権利というのはみんな持ったけど、吉野が主張したように選挙をやりながら、あるいは選挙運動にかかわりながらみんなが政治を考えていく、トレーニングを積んでいくということができたかどうかというと、こ

れは今までなかなかできていなかったんです。そういう意味でいうと、皆さんの活動というのは、僕は非常に意味があると思うんですけど、普通選挙運動というのはそういう歴史的な経緯をたどってきたわけです。

もちろん、政治に参加する、政治にかかわるというのは選挙だけではありません。

むしろ、第二次世界大戦後の日本では、選挙の世界では女性まで含めてすべてが選挙権を行使できるようになった。こういう大きな発展があったわけですが、それ以外にもさまざまな戦前にはなかった参加の手段というのが設けられたわけです。それは、とりわけ地方自治体レベルで拡大したわけですけれども、そのひとつに直接請求と言われるものがあります。住民が署名を集めて直接いろんな政策、あるいは問題の賛否を問える。あるいは、知事や市町村長、あるいは議員さん、こういった人たちがやめたほうがいいんじゃないか、リコールといいます、こういったことを住民が直接署名を集めて訴えることができる。こういうさまざまな参加の手段というものが戦後の日本では準備されてきたわけです。ところが、1990年ぐらいまではこういう直接請求とか住民投票というのは余り活用されてこなかったんですが、1990年代ぐら

いから直接請求、住民投票というものが非常に注目されるようになった。そして、数的にもどんどんふえてきています。

住民投票についていうと、産業廃棄物の問題とか、原発の問題なんかでかなりの自治体で住民投票をやるべきだという、そういう住民運動が起きました。実際に住民投票をやったところも幾つかあるんです。

今日の主題とは違いますから詳しくお話しませんが、今、地方分権化というのがどんどん進められています。この動きは、今後ますます強まると思うんです。そうすると、この直接請求や住民投票、こういったことは今後もっと活発になるといいますか、住民によって使われる可能性は強いと言えます。ただし、こういった住民投票や直接請求というものと選挙との違いというのがあるわけです。僕自身は、住民投票をやるべきだという住民運動を90年代にこの鹿児島で直接やったこともあるんですけれども、住民投票をやるべきだという人の中には、もう議会とかいらんという人がいるわけです。住民が思うことを全部住民が決めればいいじゃないかと、大体議員とか何とかはろくに勉強もしとらんから、住民たちが自分たちで全部決めればいい。こうい

う主張をする人もいます。

ただ、僕は住民投票というものも必要なんだけど、選挙というものの重要性をそこで低めてはいけないし、やっぱり選挙を通じて自分たちの代表を選ぶというこの意味をきっちり押さえた上で必要に応じて住民投票などをやっていくという考えが必要だと思うんです。なぜならば、我々住民は何から何まで政治的な決定をすることはできない。時間的にもできないし、空間的にもできないわけです。つまり、我々の代表者を選んで、その代表者が物事を決めていくという仕組みを利用しながらこの世の中を動かしていかなければいけない。ということを考えるならば、やはり多くの物事は選挙で我々が選んだ政治家が、そのルールや、仕組みや、いろんな物事を決める。その比重がやっぱり非常に大きいんです。先ほど、私たちの生活にとつての政治と言いましたけれども、私たちの生活のかなりの部分、つまり何げなく我々が使っているモノや仕組み、これを決めるのはやっぱり住民投票じゃなく議会であり、あるいはいろんな政治家なんです。例えば、産業廃棄物の建設計画がいきなり持ち上がってきて、自分の家のすぐ近くにできる。そういうのがいきなり登場してきて、どうするかとな

ったときに、どうしてもこれだけは住民投票でやりたいんだと考える。これが住民投票の意味なんです。でも、水道の水、道路、そして公共交通機関、こういったことはやはり住民投票ではなくて、その代議制民主主義というもののひとつとした形で政治の仕組みでうまく運営していく。であるからこそ、選挙というのは極めて重要なんです。こういうことを確認する必要があると思います。

それで、政治に関わるということを改めて考えてみたいと思います。今の時代は、考えてみるとだれもが政治にかかわることができる時代なんです。今言いましたように選挙権はみんな持っているわけです。そして、地方自治体にはさまざまな参加の手段もある。僕は選挙そのものの専門家じゃありませんけれども、ここに集まっている学生さんの中には僕より詳しい人がいるかもしれません、ほとんど今の先進国は普通選挙制度をしているわけです。でも、細かな仕組みは結構違うんです。日本の場合、家で寝ていても選挙の案内が来ます。家でずっと寝転がって、何も考えていなかったって、選挙が公示されると投票所の入場券が来ます。それを持って行ったら投票できる。でも、同じように普通選挙制度でやっていても、ちゃんと自分でその登録を申

し出ないと投票所への入場券がもらえないという仕組みのところもあるんです。だから、日本の場合は、特に有権者が保護されているというか大事にされている。しかし、逆に言うとももせんでもとにかく選挙ができる、そういう仕組みになっている。

ところが、そういう時代なのに、日本の場合は「誰もが政治に関わろうとしない時代」なのです。ちよつと極端かもしれませんが。若者の政治離れだけではなくて、実は我々の世代を含めて全体的に投票率は落ちていきます。そして、選挙だけではなくて、選挙に出る人も減っているわけです。例えば、衆議院議員の投票率というと、90年代以降ずっと投票率は下がり続けてきたわけです。最近、ちよつと幾つか例外はありますがけれども、全体的な傾向としましては90年代以降下がり続けてきているんです。もっと悲惨なのは自治体の選挙です。これは、自治体によつては40%を切るとか、こういった選挙も珍しくはない。40%を切るというかどうかということかと、3分の1しか選挙に行っていない。3分の1しか選挙に行っていないと、その中で一番票をとった人が当選するわけです。その結果、極端な例でいうと有権者の4分の1とか、5分の1しかその人に投票していなくても、知事になったり、市長になったり。こう

いうケースが至るところに見られるわけです。

ということと簡単に選挙に行ける、あるいは選挙以外にもいろんな参加の方法がある。でも、余りにも条件が恵まれ過ぎていて、逆に誰もそれをちゃんと使おうとしない。あるいは、その重要性というものが逆に見失われているというのが今の日本の状況だと思います。

しかし、これには歯止めをかける必要があるわけです。なぜかといいますと、多くの方がやはり政治に関わることによって世の中は動くんです。どういうことかといいますと、政治家というのは、世論を無視しては政治はできないわけなんです。当たり前のことなんですけれども、当たり前のことというのがなかなか今の日本では伝わっていない。例えば、今度の原発事故があつて、原発をどうしたらいいかというのは人によって色んな考えがありますし、今日のテーマではありませんから深くは立ち入りません。

原発の事故があつてドイツが原発をもうやめるといふ決定をしました。ドイツの首相はメルケルさんという女性の方です。メルケルさんは今回原発はもうやめると言っ

たんですけど、彼女は原発推進の政治家だったわけです。メルケルさんの政権になる前のドイツの政権では、原発をやめるということを決めていたんです。でも、メルケルさんが首相になって、彼女は原子力関係の専門家でもありました。それは無理だということ、彼女がそれ以前のドイツの電力政策を見直して、やっぱり原発は必要だと政策を変えたんです。だから、今でもメルケルさんは、ドイツはやっぱり原発を使うべきだという考えを持っているかもしれない。彼女の政治的信条はそうなんです。でも、ドイツの場合は福島事故が起きた後に、多くの国民が集会をしたり、デモをしたり、そして選挙で今のメルケル政権に対する非常に厳しい判断を下した。そういったものを見て、メルケルさん自身がやっぱり政策を変えざるを得ないと考えたんです。メルケル政権の政策は変わっていったわけです。

ということ、政治家というのは、世論を無視して政治はやっぱりできない。これは、今の社会にとっては基本なんです。逆に言うと世論の動向が、あるいは世論の質が、政治の動向や政治の質を決める。これも当たり前のことなんですけど、その当たり前のことをちゃんと確認しておく必要があると思います。

日本の場合、世論の質というのは、今は非常に低くなっていると思います。簡単に言うと、僕は日本の世論というのは非常に評論家的になっていると思うんです。ここに足を運んでいる学生さんたちはちょっと違うかもしれません。しかし、ゼミ生なんかと話していると「しよせん政治は変わりませんよ、先生」とか、こういう学生が結構多いんです。「そんなことを言ったって変わりませんよ」とか、あるいは原発の事故があつて、僕は学生にも原発については色んな考えがあるから何かを強制はしないというのが僕のスタイルなんですが、色々意見を聞くわけです。ただ、その意見の中に「結局、今は大変かもしれないけど、鹿児島で我々が考えたって意味があるんですかね」とか、そういう学生の中にはいるんです。それから、学生だけじゃなくて、例えば同僚の先生なんかと話していても、たまに「今の野田政権はやっぱ頼りないですな」とか、菅さんのときでも「菅さんは、何か1人で突っ張っているだけで情けないな」とか、評論家的なことは結構みんな言うんです。けれども、じゃあ自分は選挙でどこを支持すれば今の状況がちょっとでも変えられるのか、あるいは自分は政治にどうかかわればいいのか。こういう発想が極めて希薄なんです。だから、政治の話を

しても同じところをぐるぐる回って1歩も前に進まない。野田さんはだめですねとか、菅さんは云々。こういうレシピを見て評価を交換し合う。そういうレベルにとどまっているような感じなんです。これは、マスコミの報道のあり方にも大きな問題があるんですけれども、これが今の日本の世論の傾向であるとするならば、やはり日本の政治というのはなかなかいい方向には行かない可能性が強いと思います。

であるからこそ、今日最初に言いました自分たちにとつての政治の意味というものを、ちゃんともう一度再発見、再確認をして参加をすることの意味、参加する中で選挙というものが持っている意味、これを、こういう時代だからこそきっちり認識して、そして色んな人に働きかけていく必要があるんじゃないかと思っています。

まとめとして、「政治の意味を改めて考えてみよう」という話しをしたいと思います。僕は、今、問われているのは『政治リテラシー』と『情報リテラシー』だと思います。まず政治リテラシーとはどういうことかといいますと、1つは政治というのは評論だけをして変わるものではないし、やはり政治というものを变える、あるいはよりよい方向に持って行くには、何らかの主體的な関わりをそれぞれが持つことなんだと。ま

ず、多くの人がそういう考えを持てるかどうかというのが1つ。しかし、その際に大事なのは、今のいわゆる先進社会とか民主主義社会と言われる社会にあっては、それぞれの政治的立場、政治的な価値観、これは決して単一ではない。さまざまな価値観や政治的立場がある。それをお互いに尊重しながら合意をつくることができるか、間て討議をすることができ、あるいは討議をしながら合意をつくることができるかどうか。その能力というのが、実は政治リテラシーというものなんです。

菅内閣はいろいろ批判すべき点はあるんですが、菅さんが総理大臣になって間もないときに「熟議」という言葉を彼は使ったんです。これは、最近政治学の世界では非常に注目されている用語なんです。つまり成熟した議論を積み重ねて合意をつくっていくということができかどうか、それを1つの単語であらわしたのが『熟議デモクラシー』という言葉でありまして、その熟議デモクラシーというのは今僕が言ったような異なる価値観、異なる立場、これを尊重しながら相互の討論を通して1つの合意を形成することができかどうか。この能力を政治家たちは持っているのかどうか。それは政治家たちだけに期待するのではなくて、その政治家を選ぶ我々

がそういう政治文化を身につけているかどうか。恐らく、こういう「学生投票率100%をめざす会」のような運動などをやっているときにも、皆さんの中で運動を一生懸命やろうとすればするほど、進め方であるとか、こういうことをやったほうがいいとか、結構いろいろ中で意見の対立というのは起こると思います。これは、別に悪いことではないと僕は思うんです。意見の対立が起こったときに、そこで皆さんが今言ったような政治リテラシーというものを、そういう経験を通じて高めていけばいいわけなんです。そういった政治リテラシーというものを、やはり身につけていく必要があるのではないか。

そして、もう1つが、情報リテラシーということです。政治リテラシーというものを身につけるためには、我々はやはり情報というものをある意味では慎重に、ある意味では積極的に摂取していかなければいけない。慎重にと言ったのは何かといいますと、殊に政治に関する情報については、マスコミ報道というのはどうも政策であるとかそういったことよりは政局報道、下手をすると政治家のプライバシーに関する報道、こういったものに非常に傾斜する。あるいは、劇場型政治と言われますけれども、一

風変わった政治家の変わった点をクローズアップする。こういったところに走る傾向があります。僕は今年『首長の暴走』という、阿久根市の変った市長さんがこの前リコールでやめた時のことなんかを書いた本ですが、その中でも書いたように、マスコミは変わり種の政治家の変った部分にばかり食いつくんです。そしてどんどん情報を流す。でも、これは余り政治の本質と関係ない部分もかなりある。ところが、いわゆる視聴者であるとか、新聞の読者はそっちのほうが目白から、とりわけテレビなんかはそっちのほうが視聴率が上がる。そうすると、またテレビ、マスコミはそっちのほうに走る。野田さんがこの前アメリカに行ったときに、何で野田さんの奥さんがあんなにたくさん出ないといけないのか。冷静に考えるとそうなんです。やっぱり野田さんがアメリカでどういう交渉をして、何を決めて、何が決められなかったのかということを中心に政治報道をすべきだったのに、野田さんの奥さんも結構出演回数時間が長い。これが、今の日本のマスコミの大きな問題なんです。だから、マスコミが流すことを何でも吸収すればいいというわけではない。やはり、もう少し冷静な目を持ちながら摂取する必要がある。さらにインターネットというのが今は発達してい

ますけれども、インターネットの情報というのは、本当なのかという情報もかなりその中にはまぎっています。そういったものを取捨選択する能力がないと、政治に関する極めて誤った判断を我々自身がしかねない。そういう情報リテラシーというものを身につけ、そして政治リテラシーというものを高めていく。そして、そういった我々が選挙を通して政治家というものを選んでいく、そういう状況をつくるのができれば政治家の質というものもおのずと変わっていくと思うんです。

残念ながら、今は政治家のほうも有権者を見くびっているところがあって、選挙のときだけ有権者というのは投票所に行つて、後は何も見ていない。こういうふうに考えている政治家も、実は多いわけです。だから、これは政治家にとっても不幸だし、有権者にとっても不幸なんです。つまり、政治家と有権者が一種の緊張関係を持ちながら、政治リテラシーを高めていく。こういった方向に向かつていけるかどうかということが今問われているわけです。

その意味で、最初に言いましたように皆さんの活動というのが、大変意味がある活動ですし、若者だけじゃなくてほかの年代にもいろんな形で声を届けながら、そして

政治というものをお互い考える、あるいはお互い政治リテラシーを高め合う。そういうものにぜひつながってほしいと思います。

私の話はここで終わらせてもらいたいと思います。どうもありがとうございます。（拍手）

政治を身近にする一つの方法 未成年模擬選挙

模擬選挙推進ネットワーク代表 山崎 武昭

平成23年11月28日 於 島根県松江市

皆様、初めまして。模擬選挙推進ネットワークの代表を務めております山崎武昭と申します。若輩の自分が皆様の前で話をさせていただくというのがすごく恐縮で、とても緊張しているんですけれども、逆に皆様にはリラックスして聞いていただけたらなと思っております。よろしくお願いいたします。

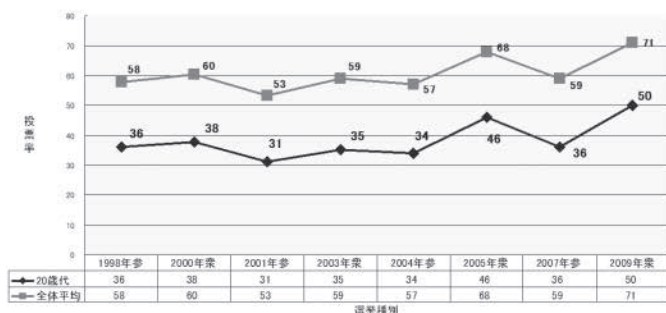
では、まずいきなりですが、皆さんに質問してみたいと思います。未成年は選挙に関係があるでしょうか。挙手で聞いてみたいと思います。関係があると思われる方。

——余り手が挙がらないですか。ちらほらです。では、関係ないと思われる方。——
ないほうにも特には挙がらないですか。

すべての未成年がこう思っているわけではないんですが、関係ないじゃないと思っている未成年は存在しています。なぜかといいますと、未成年は選挙に投票できないから。それはそうです。選挙権は20歳になっからなので、未成年は選挙に投票できません。

でも、それだけではありません。例えば、駅前などで政治家の人たちがビラを配っていても、そのビラが未成年には渡されなかったり、またお子さんのほうでそういうのに興味を持っても、一緒に歩いている母親のほうが「そんなの、もらってはだめでしょう」と言っって、もらわないようにさせたり、そういったことがあったりすると、むしろ政治は自分たちには関係ないものだと大人から認識させられてしまっているのではないかと思っています。その結果として、関係ないも

図1 20歳代と全体平均投票率の比較



のだと思っただけ、20歳、選挙権を得る状態を迎えてしまっているのではないかと。

ここに20代の投票率を出してみました(図1)。こちらの上の線が全体の投票率の平均になっています。こちらの下の線が20代の投票率になっています。これは全国の平均です。去年の参議院選挙の前に作成したので、まだ参議院選挙のものが反映されていないんですが、これを見ていただくと、まず全体の投票率が大体60%前後です。島根県の皆様から見たらこの数字もしかしたら低いと感じられてしまうかもしれません。いんですが、それに比べて20代の投票率は大体が40%前後になっています。これを見ていくと、大体全体の投票率から20%を引いた数字が、ちょうど20代の投票率という感じになっています。

先ほど紹介がありましたように自分はまだ政治経済学部というところに通っている学生です。それで、3年前の授業になるんですけども、とある授業で先生が学生に質問しました。「この中で自分は毎回、選挙で投票に行くぞという人はどれぐらいいますか?」。その教室には学生は100人から200人くらいいました。

ここでもまた聞いてみたいと思います。一体その中の何人が毎回投票に行く手を挙

げたでしょうか。①100人、ほぼ全員。②50〜80人、過半数ぐらいの人。③1割程度の10〜20人。④1人だけ。一応もう1回言いますと、政治経済学部です。授業の名前は政治経済分析です。では、①だと思われる方。全然、手が挙がりませんね。おかしいですね。では、②50〜80人ぐらいではないか。ちらほら手が挙がりますね。でも、こちら辺で挙げていただかないということで、いかに自分たちが信頼されていないかというのがわかります。では、③の1割程度、10〜20人。これが大半ですかね。では、④1人だけ。手が挙がってしまいましたか。

では、正解発表にまいりたいと思います。正解は④の1人だけということでした。申しわけありません。いかに皆さんが日ごろ活動に苦労されていらつしやるかがよくわかるような数字だと思います。

でも、変な話、自分からしてしまえば、これは当然のことではないかと思われるんですね。それは、先ほども言いましたように、未成年のときはずっと政治は関係ないものだと思って過ごしてきてしまっていて、それは20歳になっても余り変わらない。

去年の参議院選挙のときに投票に行かなかった、棄権した人が何で棄権したのかと

いう理由を調べてみました。一番多いのが、「仕事があったから」。次が「重要な用事」ということで、用事があったから行かなかったという人が多いんですが、その下にくるのが「適当な候補者も政党もなかったから」で、これが18・4%。次は、「選挙に余り関心がなかったから」で、14・9%。その次は、「政党の政策や候補者の人物像がよくわからなかったから」というのが12・4%。次の「体調がすぐれなかったから」、下のほうに「病気だったから」というのがあるんですが、こちらは先ほど話があった不在者投票にも若干関係してくるのかもしれませんが、そういうのは飛ばしまして、「選挙によって政治はよくなるかと思っただから」というのが10・8%、「私1人が投票してもしなくても同じだから」が9・7%、「面倒だから」が7・8%ということになっています。これはあくまでも有権者全体のほうの調査の結果になります。

もう1つ、20代と30代だけに聞いたこの結果を取り出したものもありました。それとあわせて、何で20代とかが投票に余り行っていないのかということについて理由を考えてみました。そうしたら、4つの「わからない」があるのではないかと自分は思っています。

1つ目、『政治がわからない、関わりたくない。』先ほどの棄権の理由、特に20代から30代の結果を見ますと、ここに当てはまるのは、例えば、「選挙に余り関心がなかったから」という人が19・6%、「選挙によっては政治がよくならないと思ったから」という人が11・2%、「面倒だから」という人が9・8%、こういった人たちは政治がわからないとか、かかわりたくないという認識で投票に行っていないのかなと思います。

次に、『投票の仕方がわからない。』棄権の理由のところにはなかなか挙がつてこないんですけれども、特に初めて選挙権を得た人にとっては、投票に行くということがすごくハードルが高いことのように思えてしまって、よくわからない、難しいのではないかという理由で投票に行かないという話を聞いたりもします。

3つ目は、『誰に入れたらいいのか、わからない。』棄権の理由の中にあったのは、「適当な候補者も政党もなかったから」が15・4%、「政党の政策や候補者の人物像がよくわからなかったから」が13・3%、こういった人たちの理由は、誰に入れたらいいか、わからないということかなと思っています。

4つ目は、『自分が投票していいか、わからない。』これはなかなか理由としては余り聞かないところなのかもしれませんが、こういったデータがあります。若い有権者の意識調査を財団法人明るい選挙推進協会で行っていたんですが、その中の「自分のように政治のことがよくわからない者が投票しないほうがいい」という問いに対して、「そう思う」と答えた人が、有権者全体では約5%なのに対して、20代では10%であり、「どちらかといえばそう思う」も、有権者全体で6・6%に対して20代では12・3%でした。逆に、「よくわからない者は投票しないほうがいい」とは「特には思わない」人が、全体では77%いるのに対して、20代では56%しかないというところで、自分なんか投票していいのか、政治的判断能力というものに対しての自信がないから投票に行かないという人もいます。

実際に自分が大学などで話を聞いても、先ほども言いましたように政治経済学部ですの、ある程度政治について学んでいるところであつて、さらに自分から見たら結構しっかりした学生だと思う人が、「でも、自分なんか余りちゃんと政治のことを考えられていないから投票に行かないほうがいいんじゃないかな」と言ったりしてお

り、結構必要以上に謙虚になってしまっている人もいるようです。

これらの4つの「わからない」に対して自分たちが取り組んでいる活動が、この未成年模擬選挙になります。

未成年模擬選挙とは何なのかということです。本当に名前のとおりで、未成年が大人と同じ本物の選挙に対して投票の体験を行うという取り組みになります。この活動は日本では2002年から始まりまして、昨日投票がありました大阪の知事選や市長選での実施も含めこれまでに26の選挙でやってまいりました。これまで日本では延べで3万5000人以上がこれに参加してくれています。また、この模擬選挙は昨年、神奈川県がすべての県立高校で実施いたしました。県立高校が神奈川県では133校あるんですが、そのすべての学校で実施された、その生徒数はこの3万5000人には含んでおりません。この模擬選挙は国政選挙から市議会議員選挙まで、すべての種類の選挙において実施の事例があります。

また、この模擬選挙は海外ではすごく盛んに行われています。今選ばれているアメリカのオバマ大統領ですが、2008年にあのオバマ大統領が選ばれた選挙のときは

アメリカ全体で約1000万人がこの模擬選挙に参加しています。日本の数字に比べたら本当にもの凄いです。また、そういったアメリカなどの事例ですと、大人の投票所の横に模擬投票所を設けているところもあったりします。なので、投票所の入り口まで親子で一緒に行って、大人は本物の投票所のほうに行く、子どもは模擬投票所のほうに行くというようなことでそれぞれ投票していたりということもあったりします。

この模擬選挙の効果ですけども、5つの効果があると思っています。この5つの効果について、先ほどの4つの「わからない」と照らし合わせて見ていきたいと思えます。

1つ目に、国や地域について考えるきっかけとなる。投票する候補者を選ぶ過程で、それまで知らなかった国や地域の課題、社会的な問題に気づき、考える・興味を持つきっかけとなります。これは先ほどの4つの「わからない」のうちの1つ目の『政治がわからない、関わりたくない』というのに対応している効果かなと思っています。

2つ目に、政治に対する継続的関心と呼び起こせる。実際の候補者や政党に対して

投票しますので、自分が投票した人がその後、実際の選挙ではどうなったのか、また当選していたらその人は任期の最中に一体どういうことをやったのか、もしくは自分が投票した人が落選していたとしたら、かわりに当選した人は一体その任期の最中にどういうことをやったのかというところが気になりますので継続的な関心を期待できます。これも1つ目の『政治がわからない、関わりたくない』に対応している効果かなと思います。

3つ目に、投票の仕方を学び、自信をつける。実際の選挙と連動した模擬選挙を通じて、だれも教えてくれない投票方法や立候補者・政党などの選び方を学び、投票する自信を持てるようになります。これは、2つ目、3つ目、4つ目の『投票の仕方がわからない』、『誰に入れたらいいのかわからない』、『自分が投票していいかわからない』というものに対応している効果だと思っています。

4つ目に、政治についての対話を家庭や地域で生み出す。模擬選挙をやったりすると結構その話を家庭の中でやられたりということがあったりするんですけども、それが大人に対する投票の働きかけになるのではないかと思います。例えば、家の

中で子どもから「お父さん、今度、選挙があるけど、投票、行くんだよね」と言われたら、親としては結構ビビりますね。行かないといけない、と思うのではないかと思うんです。そういったことで、子どもが大人に対して働きかける効果もあるのではないかと思っています。

5つ目に、未成年の声を社会に発信できる。これは一見関係ないように思われるかもしれませんが、実はすごく意味があることなので後で紹介したいと思っています。ここから、では実際に模擬選挙にどういった感じで取り組まれているかということについて紹介していきたいと思います。

模擬選挙の実施の仕方ですが、主に3つの方法があります。1つ目は学校、2つ目は地域、3つ目はインターネットなどでの投票になります。

まず、学校についてお話ししたいと思います。学校での実践、3つの方法の中でこれが一番多いんですが、北は北海道から南は沖縄まで全国の学校で取り組まれています。学校の種類も豊富で、小学校から、中高、高専や専門学校といろいろな学校で行われています。その中で一番多いのはやはり中学校と高校です。こういった取り組み

は私立の学校のほうがやっているのではないかとよく言われたりするんですが、そんなことも必ずしもなくて、実際にやっている学校の数としては公立の学校のほうが多く実施しています。

また特徴としては、実施の仕方を完全にその学校や先生ごとにお任せしてしまっているの、学校や先生方の事情とか状態に応じて非常に自由に取り組みをしてもらえているということがあります。

ここでまた皆様に質問してみたいと思います。この中で模擬選挙を実施している教科はどれでしょうか。①国語。②社会。③英語。また挙手で聞いてみたいと思います。①の国語だと思われる方。——全然いらっしやらないですね。では、②の社会だと思われる方。——ほぼ全員の皆さん。③の英語だと思われる方。——いらっしやらないですね。これは聞くまでもなかったかもしれないですね。

では、正解ですが、これはすべてされています。国語や英語でもやっています。実際にどう感じるでやっているのかというのを順々に紹介していきたいと思います。

社会科というのは一番それっぽいですね。授業としても、例えば中学校であれば公

民という授業がありますし、高校になると現代社会や政治経済という授業があったりします。また、一応日本史や世界史の授業をやっているにしても、社会科という全体の枠組みで見たときに、選挙に対して取り組むということに対して価値を感じられた先生が、ちよつとカリキュラムを変更して、模擬選挙を1時間やってみるとか、そういったこともあったりします。

ここからは社会科以外ですが、情報という授業があったりします。よくパソコンの使い方などについて教えている授業でもあったりするんですが、この情報の授業というのは情報をどこから入手して、それをどう分析して、どう発信していくのかということや学ぶ授業であつたりしますので、そういったところでは選挙にも通ずるものがあるのかなと。というのは、政策の情報をどこから入手して、自分の中で誰に投票しようか決めて、最終的にはそれを投票という形にする、この流れというのは情報科にすごく似ているところがあつて、そういった面で取り組まれているのかなと思つています。

英語。これはすごく意外に思われるのかもしれませんが、最近NIEという取

り組みがあります。Newspaper In Education といふことで、「教育に新聞を」という取り組みになるんですが、その中で英字新聞を使って授業をする先生がいらっしゃいます。英字新聞といつても、日本のものを使うと当然、日本のそのときのニュースが英語になっているだけです。選挙をやっている時であれば、英字新聞にも当然その選挙についての報道がされることになる。より生徒さんが興味を持って新聞の内容を読むようにということで、体験学習をする、投票をする、というただ読むだけではなくてそれを活かす場を設定することによってより興味を持って英字新聞を読んでもらえるように、この模擬選挙を実施したりしています。

国語の時間の中ということでは小論文の時間で取り組んでいる先生もいらっしゃるんですが、これは先ほどの情報の授業にも共通するかもしれないんですが、小論文というのも自分の考えというのを決めて、それを実際に文章化するという過程は、選挙にもやや似ているところがあるということで、小論文の時間に取り組んでいる先生もいらっしゃいます。

今まで紹介してきたのは授業内での取り組みですが、もう少し詳しく見ていきたい

と思います。

この授業実践例は非常に細かい内容になってしまっているので軽く紹介しますが、授業で実施する際には特徴がありまして、それはただ投票するだけではなくて、まず事前に学習活動を行う。それで、投票した後にはさらに、事後学習という形の流れになっています。

事前学習として主にということがされるかというと、普通の社会科の授業でも行われているかもしれないんですが、選挙制度の仕組みについて学んだり、選挙権の歴史について学んだり。一番メインとなるのはやはり実際の各党、各候補者の政策情報を調べる、マニフェストをまとめるということが、主にこの事前学習ではやられていたりします。それで、投票があつて、事後学習ではどういうことがされているかというのですが、主に行われるのはやはり実際の選挙結果と未成年の投票結果を比較したり、選挙結果を踏まえてこれからの政治がどういうふうに動いていきそうなのかということについて考えてもらったりしています。

また、その他にも一応教科書や年間カリキュラム的にも位置づけられて実施されて



いたり、あとは、その取り組みの仕方もいろいろあって、例えば租税教室を行い、税務署の方を招いて話をしてもらうのですが、その税の使い道を決めるのが議会の場、政治家であるというような話をして模擬選挙をやっている事例もあつたりします。

実際の写真を見ながら様子を紹介していきたいと思います。

上の写真は事前学習の時間帯で、今グループワークごとに政策、マニフェストを見て比較しているところになっていきます。下の写真が投票している様子です。こちらの投票箱は本物をお借りしてやっています。各地の選挙管理委員会さんに、「模擬選挙をやるので投票箱を貸していただけませんか」と連絡したら、大体のところがちゃんと貸していただけます。本物の投票箱

を使うということがすごく、例えば、投票箱を見せたりすると、それだけですごく生徒さんの興味を引きつけたりするんですね。「おおー」という声だとか、「すごい」という声だとか。そういう面で本物の投票箱を使つてやるというのはすごく効果があることなのかなと思っています。

先程のは授業のクラスでそのまま投票していた様子ですが、こういった形で授業のクラスとは別の教室に模擬投票所を設けてやっているところもあったりします。こちらでも本物の投票箱を借りてやっているんですが、それだけではなく、このように記載台までお借りしてやっていたりします。

ちゃんと秘密投票が模擬選挙でも守られるようにやっているんですが、ただ、ちょっとここで面白かったのが、実際にそのやっている様子を見学に行ったりすると、秘密投票というのが余り未成年の中では大事にされていない様子が見えてとれて、むしろ積極的に、「おまえ、だれに投票



したの？」とか、隣をのぞきながら投票していたり、そういうことがあります。

面白いと思うのは、日本の状況を見ると、大人というのは、割と政治の話がタブーになってしまっているところがあって、政治の話や選挙の話というのは気軽にはできない様子があると思うんですが、アメリカの選挙などを見ていますと、例えば、コンビニでコーヒーを売っていて、オバマ・カップとマケイン・カップというのがあって、「あなたはどっちで飲みますか」というようなことをしていたり、選挙の時期になると本屋さんに選挙コーナーみたいなのがあって選挙の本が並んでいたります。あるいはコストリカという国だと、選挙の時期になると自分が支持する政党の旗を車に立ててそれぞれ運転しているという話を聞いたり、諸外国では政治に対して結構オープンな雰囲気があつて、そういった雰囲気がもし今後、今の未成年が大きくなっていて日本にも持ち込まれたりすると、もしかしたら政治に対する雰囲気も若干明るいほうに変わっていくということもあり得るのかなと思っています。

あとは、判断材料として選管さんからこういった選挙公報ももらっていたりしていますので、そういったものを張っていたりします。

ここまででは授業内での取り組みを見てきたんですが、ここからは授業外でどういった感じでやられているのかについて紹介していきたいと思います。

授業の外でやっているのも、主に休み時間や放課後に投票してもらうことになります。特徴として、本物の選挙に限りなく近づけられるということがあります。よく選挙の投票所は学校の体育館が利用されていたりすることがあると思うんですが、同じようにこの模擬選挙の投票所を体育館でやって、入り口のところで名簿のチェックを行って二重投票しないようにしたり、あとは先ほどのように記載台を使ったり本物の投票箱を使ったりということ、本物の選挙に近づけられるということが最大の特徴かなと思います。

これも授業外でやるときには生徒さんの組織、生徒会であったり校内の選挙管理委員会であったり、の協力を得てやってもらえるとすぐ効果があります。模擬選挙の投票の呼びかけをする際に、先生から呼びかけられるだけではなくて、友達から誘われる。例えば、帰り際に友達から「今、模擬選挙をやっているから投票してってよ」と言われたら、選挙そのものには余り興味がなかった子も、「友達に誘われたからや



ってみるかな」という感じで投票してくれたり、そういう面で興味を持ってもらえるきっかけになるということでは生徒さんに一緒にやってもらえたとすごく効果があります。

また、それだけではなくて授業外で行うので、必ずしも先生が実施しなくてもよいということがあって、生徒さんのほうだけで実施したという事例もあつたりします。

具体的には生徒会や、あとは学校によって部活で、変わった部活だと新聞部というのがある学校があつたんですが、そのこの部活の取り組みとしてこの模擬選挙をやったという事例があつたりします。

授業外での実施の様子も写真で見ていきたいと思えますが、上の写真をご覧ください。こういった感じで、「本日投票」と書いて雰囲気づくりをされていたりします。次のページをご覧ください。このように、こちらも投票箱を、本物を使わせてもらっています。こんな感じで列をなして



投票してくれたりしています。

以上、学校での取り組みについて紹介してきましたが、学校での実施の長所としては、確実に体験の機会を設けることができる場所にあるのかなと思っています。というのは、基本的には学校というのは誰もが行く場所にはなっていますので、そういった面ですべての人に体験の機会を提供できるということが長所かなと思っています。また、事前、事後に学習活動を行うことで、よりしっかりした学びの場としてもらえるというところがあると思います。短所としては、事前に学校側、教育委員会側との交渉や調整が必要ということにはなるんですが、余り気にする必要もない短所なのかもしれません。

次に、地域ではどういった感じで取り組まれているかということについて紹介していきます。地域でやる際ですが、駅前、ショッピングモール、イベントの会場など、人が集まる場所、未成年がよく集まるようなところで投票の呼びかけを

行います。ただ募金のように立って投票を呼びかけるだけではほとんどだれも投票してくれませんが、いわゆるキャッチセールスのようにこちらから積極的に声をかけていきます。道行く未成年に「今、選挙をやっているんだけど、投票してみない？」という感じで声をかけて投票してもらったりしています。

判断材料としては同じように選挙公報。先ほど紹介するのを忘れてしまったんですが、学校で実施する際には、国政選挙であれば各政党からポスター、マニフェストの実物をもらっていますので、そういったものを提供したりしています。ということで、地域で実施する際にも政党のマニフェストを用意したりしています。また、よく駅前などにはポスターの掲示板があったりするかなと思うんですけども、各候補者のポスターが張ってある掲示板、ああいったものが近くにあったりするとそれも使えたりします。

地域で実施する際には、その地域の団体、特に子ども関係の活動をしている子ども会であるとか、NPOなどに協力してもらえるとよかったです。

地域でキャンペーンをやっていると大人に対する啓発にもなるんだというのがわ

かりました。駅前などでやっていますので大人の目にももちろんつきます。そうすると「そういうえば今選挙をやっていたんだな」という声をたまに聞きます。そういう面では大人に対する効果にもなっているかなというのがちょっと面白いところだったりします。

こちらでも写真で様子を見ていきたいと思っています。これは日本で一番若者が集まる街と言われています。渋谷の様子になります。この写真はNHKなどにもよく出てくるスクランブル交差点の前で投票してもらっている様子になります。信号待ちをしている子たちをつかまえて投票してもらっています。



す。よくこういった模擬選挙をやっていると、投票してくれるのは真面目な子ばかりなのではないかと思われるかもしれませんが、むしろ逆だというのが実際にやっていて思いました。いかにも見た目的にはそんなに政治に興味がないのではないかと思われるような子たちの方が、声をかけてみると、意外とこういう人たちのほうが反応がよくて、自分自身も渋谷で女子高生に対して投票してもらったりしているんですが、声をかけると、「いや、私、そんな政治とか興味ないし」と最初は言うんですが、でも、そこで引き下がらず粘って話をしてみると、昔見たニュースのことを思い出しながら、「そういえば、何か小泉さんって、こういうことをやってたよねー」と言いながら投票してくれたりします。逆に、塾通いしているお子さんに声をかけたりすると、「急いめますんで」みたいな感じで素通りしていったりということ、意外と外見的には政治に興味がなさそうに見える人たちのほうが、かえって反応してくれるというところは、まさに将来投票にもしかしら行ってくれなかったかもしれない子たちに届く活動ということで、すごくいいかなと思っています。これは、学校でやっている先生方に話を聞いても同じことをおっしゃっていて、模擬選挙を授業でや

ると、変な話、ふだんの授業は余りちゃんと聞いていない子のほうが積極的に参加してくるということを聞いたりもします。

また、場所によっては、上の写真のように駅前にも机を並べて投票してもらってやっているところもあったり、イベントの会場などでは下の写真のような感じでポスター



を貼って雰囲気づくりをしています。投票所をつくったりもしています。

地域での実施の特徴ですが、長所としては、対象の年齢を問わないということがあるのかなと思います。学校でやると、どうしても学校の中にいる子しか投票できないんですが、地域でやると、本当に下

は3歳から上は19歳まで投票してもらえるとすることがあつたりします。また、実施の障害が割と低いところ。あとは、最大の長所であると思うんですが、直接啓発ができるというところがあると思います。

一方の短所としましては、ある特定の場所、特定の時間帯で行いますので、その時間、その場所に来なかった人に対しては投票の呼びかけができないということがデメリットだったりします。そういう面では学校でやるほうがより確実と言えるかもしれません。

最後に、インターネットなどでの投票。こちらは本当に軽くだけ紹介しますが、インターネットなのでだれでも参加してもらえということがあるんですけども、デメリットとしては、もともと興味がある人しか検索して調べてくれませんので、そういう面ではもともとから興味がある人しか参加してくれないところがデメリットかなと思います。

ここまで模擬選挙を実際にどういうふうに行っているのかというのを話してきましたが、模擬選挙をやるかどうかという結果が出るのか、未成年はどういう投票をするの

かということについて紹介したいと思います。

2010年参議院選挙の際の未成年模擬選挙の結果をみると、未成年の投票結果は、ほとんど大人と変わりません。去年の参議院選挙の比例選挙のもですが、大人のほうの選挙結果では民主党がトップで、次に自民党、その次にみんなの党と続いていたんですが、未成年のほうも同じくトップが民主党、次が自民党、それでみんなの党というふうに続いています。ほとんど変わりませんでした。このときだけ特別ということではなくて、2009年衆議院選挙のときの結果を見ましても、大人のほうは民主党がトップ、次に自民党という順だったんですが、未成年のほうも民主党、自民党というふうに続いています。

これだけを見ると、両方とも民主党が勝っているので、民主が強いのではないかと思われたりするかもしれないんですが、2005年の衆議院選挙では大人が圧倒的に自民党に投票していたんですが、そのときは未成年もやはり自民党のほうが多く、2009年のときはむしろ大人よりも自民票がふえ、民主党の票が減っているという傾向も見えたりしています。そういう面では本当に大人の投票結果と変わらないし、ま

た模擬選挙の実施自体がちゃんと中立に公平に行われていると言えるのかなと思っています。この投票結果が近いということについては記憶の中にとどめていただけたらなと思っています。

では、ここからは、実施してみたら生徒さん方、未成年からはこういった感想があったのかということについて見ていきたいと思います。

感想を抜粋してきました。「政治についてこんなに考えたのは初めてかもしれない」。12歳の子が言っているのです、それは初めてだろうと思うんですけれども。次に、「結構楽しかった。でも、結構悩んだ」。3つ目、「何の機会も与えられていなかったら選挙には行かなかったと思うし、選挙について見るということはなかった。国民としてやるべきことをするきっかけにもなった」。すごく立派なことを言ってくれています。ただ感想をずらずら並べていってもしようがないので、先ほど紹介しました模擬選挙の5つの意義について照らし合わせながら見ていきたいと思います。

1つ目に、国や地域に考えるきっかけとなっているかどうか。「こんなに政党があるなんて知らなかった。もっと勉強してまたやってみたい」。「何も知らない自分が：

（汗）。「政治について少し理解できた。この機会に調べた」。「いつもなら政治のニュースは何となく聞いていただけだったけれど、興味をもつて聞けた」。また、「選ぶのが難しかった」という難しかったという感想は結構あつたりします。でも、この難しいというのは、実際に大人にとっても選挙というのはすごく難しかったですし、本当に難しいからこそ、逆に日ごろからちゃんと見て考えて投票しないといけないんだなということを学んでもらえるということで、すごくいい感想でもあるかなと思っています。

2つ目に、政治に対する継続的関心を引き起こしているかどうか。「自分が選んだ人が選ばれるか、気になる」。「ふだんから政治に関心を持って暮らしていないと、選挙に参加しても、よくわからないまま投票することになってしまうと思った」。

模擬選挙の感想も、投票と同じく匿名で書いてもらっています。なので、模擬選挙に対して結構厳しいコメントが寄せられることもあつたりします。それがこれだつたりするんですが、「いきなり書けるわけがないのに、適当な票を集めるぐらいだったら、こんなのはしないでください」。ただ、模擬選挙のことをすごく痛烈に批判している

ようで、すごく模擬選挙のことをかえってわかっている感想でもあったりするのかな
とったりもしています。それは、本当に「いきなり書けるわけない」からこそ、だ
からこそ、ふだんからちゃんと考えていなければいけないということについて感じて
もらえたなら、すごく意義があるのではないかと思っています。模擬選挙は本当にあ
くまでも興味や関心を持ってもらえるきっかけですので、そういった面でこれをスタ
ートに、ふだんから新聞やニュースを見てもらえたらいいなと思っています。

3つ目に、投票の仕方を学び自信をつけられているか。「なぜ学校で選挙の仕方、
投票の仕方を学ばないのか、不思議です。今回模擬投票をしてみても、わからないこと
がすごくたくさん出てきました。選挙権を持つ前にこのようにして経験することがで
きたのはとてもよかったと思います」。あとは、「意外に簡単なのかなと思いました」。
さつき難しかったという感想もあったんですが、逆にこういう簡単なんだという感
想も結構多かったりします。そういうふうにも思ってもらえたら、実際に選挙権を持
たときも、ハードルが低く感じてもらえて投票に行ってくれるかなと思ったたりして
います。

もう1つ紹介したいのが、「私みたいに政治について知らない人が簡単に投票するのはだめだなと思った」という感想もありました。模擬選挙で投票しているときは、周りの様子を見ていても、結構適当に決めて投票しているのではないかと不安になったりする生徒さんもいらっしやいます。そういう中でこういった感想を持つ生徒さんもいらっしやったりします。でも、ここで思い出していたきたいのは、先ほどの選挙結果になります。未成年の選挙結果と大人の選挙結果はほとんど変わらないということがあのときわかったんですが、この感想を書いた時点では選挙結果についてはまだわかっていません。なので、事後学習のところで、大人の選挙結果と未成年の選挙結果がそんなに変わっていないというのを見せることによって、こういった自分たちの投票する能力に対して不安に思ってしまった子に対しても、「自分たちも大人と同じくらいちゃんと考えられているんだ」というふうに自信を持つてもらえたらいいなと思っています。

4つ目に、大人への刺激にはなっているか。「簡単に投票できるのに、なぜ参加しない人がいるのか、ますますわからなくなつた」。「投票率が低いのが残念だ。この国

の人間が何を考えているのか、全く理解できない」。「未成年でもできるんだから、大人にだってできないわけはないんだから、ちゃんと投票に行つてほしいと思う。今の日本がだめなのは、政治家のせいではなく、そういう関心を持たないだめな大人のせいじゃないんですか」。大人の側としては、「すいません」と言うしかないところです。こういうふうに使っている生徒さんは、ぜひ将来ちゃんと投票に行つてもらいたいと思つております。

5つ目に、先ほど意義を紹介するのを飛ばした、未成年の声を社会に発信できるということですが、「楽しかった」。「選挙権のない私たちがこうして社会に意見参加できることはとてもうれしい」。「子どもなのに投票できるのはとてもうれしかった」。「本当の選挙に早く参加したい」。こういうふうに楽しかったとか、うれしかったと書いてくれる生徒さんも結構いらっしやいます。これは結構いいことかなと思つていて、それは、選挙に投票するということに対してすごくポジティブに考えてくれているのではないかと思つているんです。そうであれば、将来実際に20歳になったときにも、選挙権を得たときにも、前向きに投票に参加してくれるのかなと思つています。

感想を見てきたんですが、実際に自分が授業を見学に行ったところがありますので、そこでの様子をほんのちょっとだけ紹介したいと思います。

昨年、神奈川県立高校で実施したという話をしたんですが、そのときに実際に自分も見学に行ってきました。

このとき事前学習をやっていたんですが、どういうことをやっていたかというと、選挙権の歴史について学んでいました。昔は税金を幾ら以上納めていないと投票できなかった、昔は男しか投票できなかったというところについて学んでいました。

その中で、生徒さんから、特に先ほども紹介しましたように、割とクラスの中で、言ってみればお調子者みたいな生徒さんがいらつしゃいまして、そういった生徒さんから質問が出たのが、「どうして未成年は投票してはいけないの？」という質問が先生に対してされて。それに対して、今18歳選挙権という話があるというのを先生が紹介したりすると、「本当に18歳にはならないのか？」という質問が出てきたり。あとは、18歳選挙権でもいろんな話があったりするので、その中に「そもそも選挙権年齢を下げるというのと、成人年齢を下げるというのを分けないの？」という質問が出てきた

り。ただ、同じ18歳でも、実際には働いている人もいれば、まだ学生の人もいるということで、あえて「学生はだめにすれば？」という提案があったり。こういう発言をしているのが、クラスの中で割とはしゃいでいる生徒さんだったりするので、そういう面では模擬選挙をやることで、こういったものについて活発な意見が出てくるというのを実際に見ることができておもしろかったわけです。

一方で、公約の比較をしているところでは、「公約だから実際にそうなるか、わからないし」「しよせん公約だもんね」という選挙公約に対する不信の会話がされていたり。あとは、「投票箱がうちの前まで来てほしくない？ そうしたら投票する」という声もあったり。授業の様子を見ていると結構おもしろかったです。

実施による効果ですが、継続して実施することによる効果もあるようです。こちらにも感想から抜粋してきたんですが、「2年前にやったときよりも関心を持てるようになりました」ということで、その間に生徒さんも、例えば、ニュースを見たりということ、もう1回やったときに、前回よりも自分自身が成長しているというのを実感してもらえて、そういう面では投票する自信を持つてもらえているのではないかと思

っています。

ここまで生徒さんの感想を見てきたんですが、先生方からの感想も見たいと思います。ちよつと長くて恐縮ですが、「模擬選挙を初めて実施してみての感想ですが、市民教育の観点からその可能性を強く感じました。生徒たち、特に中学生にとってはわかりにくい選挙の制度も、体験を通じて理解することができまし、やはり実際の候補者を比較し、1人に絞って投票するという行為は、政治を身近に考えるきっかけとなります」。「ホームページにあるツールや、送付してもらったポスター等は非常に有用だった」。うちの団体では、ほかの学校の先生が使っているプリントや、実際の政党のポスター、マニフェストを提供していますので、そういったものが役に立ったということ。生徒の反応は、昨年とは比べものにならないほどよく、アンケートに書かれた感想からも、多くの生徒たちに有権者意識を育てることができたようだ」。「呼びかけた対象は中3と高1ですが、2年前に衆議院議員選挙で実施したこともあり、高2も進んで投票に参加していました」。実際にやった学年でなくても、興味を持った生徒さんが自主的に投票してくれたということで、模擬選挙をやった成果が出てい

るのかなと思っています。「今回は校内の選挙管理委員会にさまざまな作業に携わってもらったことが収穫でした。繰り返し模擬選挙を行うことで、生徒たちの中からさらに自主的な活動が生まれてくることを期待しています」。「いつも感じることだが、大人よりはるかに真剣に考えている。選挙というのは政治学習の総括でもあるが、出発点でもある。難しさを感じ、どういう基準で選ぶべきか、考えるだけでも十分な効果と言うべきだろう」。

こういった感じで、模擬選挙に取り組んでくださった先生方は結構継続的に取り組んでいただいて、学校の先生方にとっても有益なプログラムになっているのかなと思っています。

これまで基本的には感想のほうで効果を紹介してきましたが、数字的にもちゃんと効果が出ているというのを紹介したいと思います。

これは日本の事例でなくて恐縮ですが、アメリカのバーモント州というところがありまして、そこで行われたアンケート調査の結果になります。そこで、例えば、「将来大統領選挙に投票したいと思うか」といった質問に対して、模擬選挙を実施した学校

と実施していない学校とでは、それぞれの質問に対して模擬選挙をやっている学校のほうが20%高い数字が出てくるということがありました。模擬選挙の効果が一応数字的にも証明されているのかなと思っています。

学校で実施してもらうにはどうしたらいいかということですが、まずは学校との信頼関係がすごく大事だと思っています。特に問題意識、今の投票率が低い現状に対して共感してもらったり、共有してもらったりすることが大事かなと思っています。もう1つ、実施が簡単であることを伝えることも大事かなと思っています。ただ例えば学校現場はいろんな要望があったりして、あれもやれ、これもやれと言われていきますので、学校側としては全部対応していくのは難しいという話をよく聞きます。そういう状態であるからこそ、私達の団体では全国の先生方が使った教材をこちらで預って提供したりということをやっていますので、そういう面でできるだけ実施する先生の負担を減らすことが大事かなと思っています。

本物で行うことの効果。先ほども紹介したんですが、本物の投票箱を使うことですごく生徒さんの反応は変わります。さらに投票所も本物っぽくすると、生徒さんもま

るで自分が本物の選挙に投票しているかのような緊張感を持って投票してくれるという話を聞いたりします。「すごく緊張した」という感想もよく見られます。一番大事かなと思っているのが、実際の選挙を題材とすることで、実社会の政治情勢への興味・関心につながってもらえることです。生徒会選挙は学校でよくやられていたりします。たしかに生徒会選挙もすごく重要な選挙です。ただ、一番重要な点としては、そこで扱われているテーマが違うということがあります。生徒会選挙だと、例えば、外交問題は絶対争点になったりしませんので、生徒会選挙は実際の政治情勢について考える機会にはなっていない。そういう面ではこの模擬選挙はより本物の社会、政治、選挙に対しての興味や関心を引きつけることができる活動だと思っています。

ここで小話になるんですが、自分が実際にやっている中で、小学生が一番選挙通なわけではないかと思ったので、それについて紹介していききたいと思います。

小学校が投票所になるというのは多いですね。そうすると、通学路に候補者のポスター掲示板が設置してある。となると、小学生は結構そのポスター掲示板をよく見ていたりします。「このポスター、イケてないよな」とか、そういうことを言っていた

ります。自分はこの模擬選挙の活動とは別に、自分が住んでいる地元のNPOで子どもと関わる活動をしていたりするんですけども、そこでふだん遊びに来てくれている子どもに投票してもらったりしました。そのとき投票してくれたのは小学校1年生で、小学校1年生はさすがに早いんじゃないかなと自分自身も若干思っていたんですけど。投票してもらったのが市議会議員選挙だったんですが、自分が住んでいる千葉県の松戸市というところは、立候補者数が下手したら日本一ではないかと思うくらいいっぱいいて、定数が42名のところに66人ぐらいの立候補がありました。そのときですが、それだけいると選挙公報ももの凄いページ数になったりするわけです。小学校1年生だからどうかと思うていたら、驚いたのが、選挙公報の中から、「この人がいい」というのを自分でめくって見つけて、その名前を投票してくれたんです。小学校1年生だから漢字もまだ勉強していかないのではないかと思うんですけども、そんな子でも投票してくれている。あとは地域のイベントなどに政治家の方がいらっしやるのが結構あったりすると思うんですけども、そういうところで会ったことをちゃんと覚えていて、それで投票してくれるということがあったりしました。ただ、逆

に言えば、中学生や高校生になるにつれて、また大学に行くとか、就職するということになってくると、どんどん自分が住んでいる地元を離れていくという可能性が上がつてくると思うんですね。そうすると、なかなかふだん住んでいる地元についてのことを知ることが減ってくる。地元にどういう政治家がいるかということについて知ることとも減ってくるのではないかと思うんです。そうすると、下手したら小学生が一番選挙通なのかなと思うたりします。だからこそですが、中学や高校になっていくにつれて自然と離れていくのだったら、中学や高校のときには模擬選挙をやって、政治家や政治家に対する興味を継続的に持つてもらえたらいいかなと思います。

もう1つ、今、総務省で常時啓発事業のあり方等研究会というのが行われていて、先日その中間取りまとめというのが出されました。その中で模擬選挙に絡むようなことがありましたので、抜粋して紹介したいと思います。『時代に即した新たな役割として考えられるのは学校教育との連携事業や教育などが今後必要になってくるのではないか』。また、『欧米諸国に見られるように、実際の選挙について児童生徒が模擬投票を行う「未成年模擬選挙」の普及が必要なのではないか』ということが書かれてい

たりします。

この常時啓発事業のあり方等研究会ですが、近々最終的な報告取りまとめがされる予定になっています。それが出たりすると、今後、実際に各地に対して、こういった取り組みをしていったほうがいいという話が出てきたりするかなと思うんですが、その中に一応模擬選挙も入れていただいていますので、是非、今日話を聞いていただきたい皆さんには今のうちから知っていただいて、もしよければ言われる前からこの取り組みを進めていただけたらすごく幸いに存じます。

最後に、実際に自分が呼びかけてみて感じたことですが、よく若者は政治に興味や関心がないと言われたりするんですけども、先ほども言いましたように、自分が渋谷などで本当にいかにも政治に興味がなさそうな女子高生にも声をかけてみたりすると、本当に興味や関心がないわけではなくて、そういったものに対してふだん日常生活の中で考えたり、また考えたものを発揮する場所がないだけなのではないかと思われました。だからこそ、未成年にとって普通だったら選挙は身近でない。ただ成人するだけでは、それは変わらない。だとしたら、選挙権を手にする前から、もっと実際の

政治について触れるようなことができるような取り組みが必要なのではないかと思っています。模擬選挙はその1つの方法なのかなと思っています。

ということ、自分の講演は以上といたします。どうもありがとうございました。(拍手)

編集・発行：財団法人明るい選挙推進協会
〒102-0082 東京都千代田区一番町13-3
ラウンドクロス一番町7階
<http://www.akaruisenkya.or.jp/>